柏原市内遺跡群発掘調査概報

平成１８（２００６）年度

平成２０（２００８）年3月

柏原市教育委員会

はしがき

来る平成20年度は、柏原市制施行50年（半世紀）の記念の年に当たりますが、柏原市に初めて専任の文化財担当職員が配置されてからの日々を数えると、およそ四半世紀が経過いたしました。

当初は、膨大な量の埋蔵文化財発掘調査に追われる日々が続きましたが、昭和から平成へと時代が移り変わる中で、建築・開発ラッシュもようやく落ち着きを取り戻し、この間、地域の歴史や文化に対する市民の関心も増大するようになりました。教育委員会では、そうした世相の変化や時代の要請に対応して、現在では、歴史資料館を中心として文化財の普及・啓発活動にも力点を置いています。

今年度は、埋蔵文化財の発掘調査に携わる間で、昨年度に製作した市域の文化財ハンドブックである『河内柏原見聞録』を配布・販売し、市民の皆様から好評をいただきました。さらに、大阪教育大学のキャンパスに古墳時代の竪穴住居を復元し、小学生を中心にして古代の生活体験講座も実施いたしました。また、埋蔵文化財の発掘調査においても、建設・土木工事に伴うものだけではなく、これまで実態の把握が進んでいない河内国分寺の範囲確認調査も実施いたしました。

来年度以降も、市民の皆様が地域の歴史や文化に関心をもち、楽しみながら理解を深めていただけるような事業を進めてまいります。どうかご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成20年３月31日

柏原市教育委員会

例　　言

1、本書は、柏原市教育委員会が平成18年度に計画・実施した柏原市内に所在する遺跡の発掘調査概要報告書である。

2、調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化財係係長北野　重・主査桑野一幸・同石田成年・係員島内洋二（嘱託）を担当者として実施し、本書には平成18年４月１日から平成19年３月31日の間に着手した発掘調査の概要を掲載した。

3、この他、本書には平成18年度（平成18年４月１日から平成19年３月31日）に実施した発掘調査の一覧を掲載した。

4、平成18年度において文化財保護法93条第１項・第94条第１項および第99条第１項にもとづく届出・通知がなされたものは213件、その中で発掘調査の指示は13件、立会調査の指示は27件、慎重工事の指示は173件であった。また、遺跡外の確認調査は15件であった。

5、調査・整理の参加者は次のとおりである。（順不同、敬称略）

分才隆司　　阪口文子　　槇原美智子　　乃一敏江　　橋口紀子

6、本書において使用した方位は、基本的には座標北であるが、第6章の河内国分寺跡の報告では磁北を示している。また、標高の記述・記載があるものについてはＴ．Ｐ．（東京湾標準潮位）＋値である。

7、河内国分寺跡の範囲確認調査では、東条町第１・２区長をはじめとして地元の多くの方々にお世話いただきました。記して謝意を申し上げます。

8、遺構・遺物の写真は担当者が撮影した。

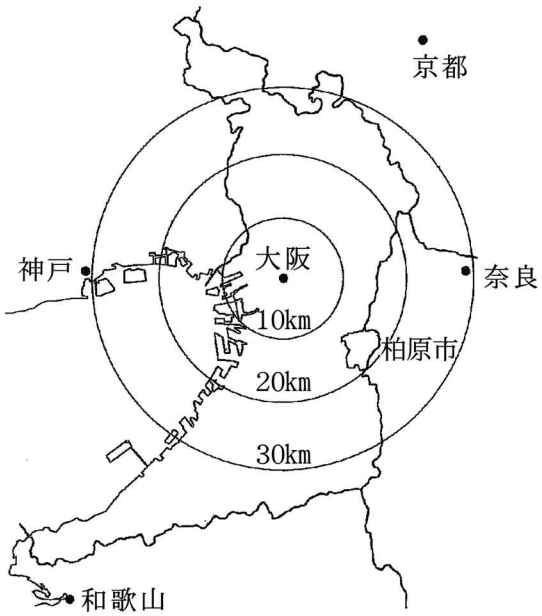
9、本書の執筆・編集は桑野が担当した。

目　　次

はしがき
例言
目次
平成18（2006）年度　柏原市内遺跡群発掘調査一覧
第１章　平野遺跡---------- 1
　　平野遺跡　2006-1次調査 ---------- 2
第２章　大県南遺跡、大県南廃寺 ---------- 3
　　大県南遺跡　2006-1次調査 ---------- 4
　　大県南廃寺　2006-1次調査 ---------- 5
第３章 玉手山遺跡 ---------- 6
　　玉手山遺跡　2006-1次調査 ---------- 7
第４章　田辺遺跡 ---------- 8
　　田辺遺跡　2006-1次調査 ---------- 9
　　田辺遺跡　2006-2次調査 ----------10
　　田辺遺跡　2006-3次調査 ----------10
第５章　河内国分尼寺跡 ----------11
　　河内国分尼寺跡　2006-1次調査 ----------12
　　河内国分尼寺跡　2006-2次調査 ----------13
第６章　河内国分寺跡 ----------14
　　河内国分寺跡　2006-1次調査 ----------15
写真図版
報告書抄録

平成18(2006)年度　柏原市内遺跡群発掘調査一覧

遺跡名　　調査次数 対象地（柏原市…）	調査面積 ㎡ 対象面積 ㎡	申請者 用途	調査日 (自･至)	文書番号 担当者	備　　考
田辺遺跡　2006-1 国分本町6-1481	4.00 1,689.71	西光寺 寺院	H18.5.26	171-26 石田・島内	本書９頁
河内国分尼寺跡　2006-1 国分東条町2601-1の一部	1.50 125.19	個人 個人住宅	H18.8.7	181-2 石田・島内	本書12頁
大県南遺跡　2006-1 大県4-160-5	4.00 350.19	個人 共同住宅	H18.10.3	181-3 石田・島内	本書４頁
大県南廃寺　2006-1 大県4-467-1/他６筆	6.00 2,147.50	ファミティホーム㈱ 宅地造成	H18.10.4	181-4 石田・島内	本書５頁
河内国分尼寺跡　2006-2 国分東条町2583-4	3.00 260.48	個人 個人住宅	H18.10.12	181-5 石田・島内	本書13頁
河内国分寺跡　2006-1 国分東条町3898/他19筆	57.15 2,264.00	柏原市教育委員会 範囲確認	H18.12.7 H19.4.10	181-8 桑野・島内	本書15頁
田辺遺跡　2006-2 田辺2-1291-1/他７筆	3.00 1,386.30	㈱京鳳 宅地造成	H18.12.28	181-1 石田・島内	本書10頁
平野遺跡　2006-1 平野2-472/473-1/473-3/474	0.96 869·79	マツダホーム㈱ 宅地造成	H19.1.31	181-6 石田・島内	本書２頁
田辺遺跡　2006-3 田辺1-322-8	1.50 98.04	個人 個人住宅	H19.1.20	181-9 石田・島内	本書10頁
玉手山遺跡　2006-1 玉手町115-192	3.00 228.36	個人 個人住宅	H19.3.7	181-12 桑野・島内	本書７頁



① 平野遺跡

② 大県南遺跡、大県南廃寺

③ 玉手山遺跡

④ 田辺遺跡

⑤ 河内国分尼寺跡

⑥ 河内国分寺跡

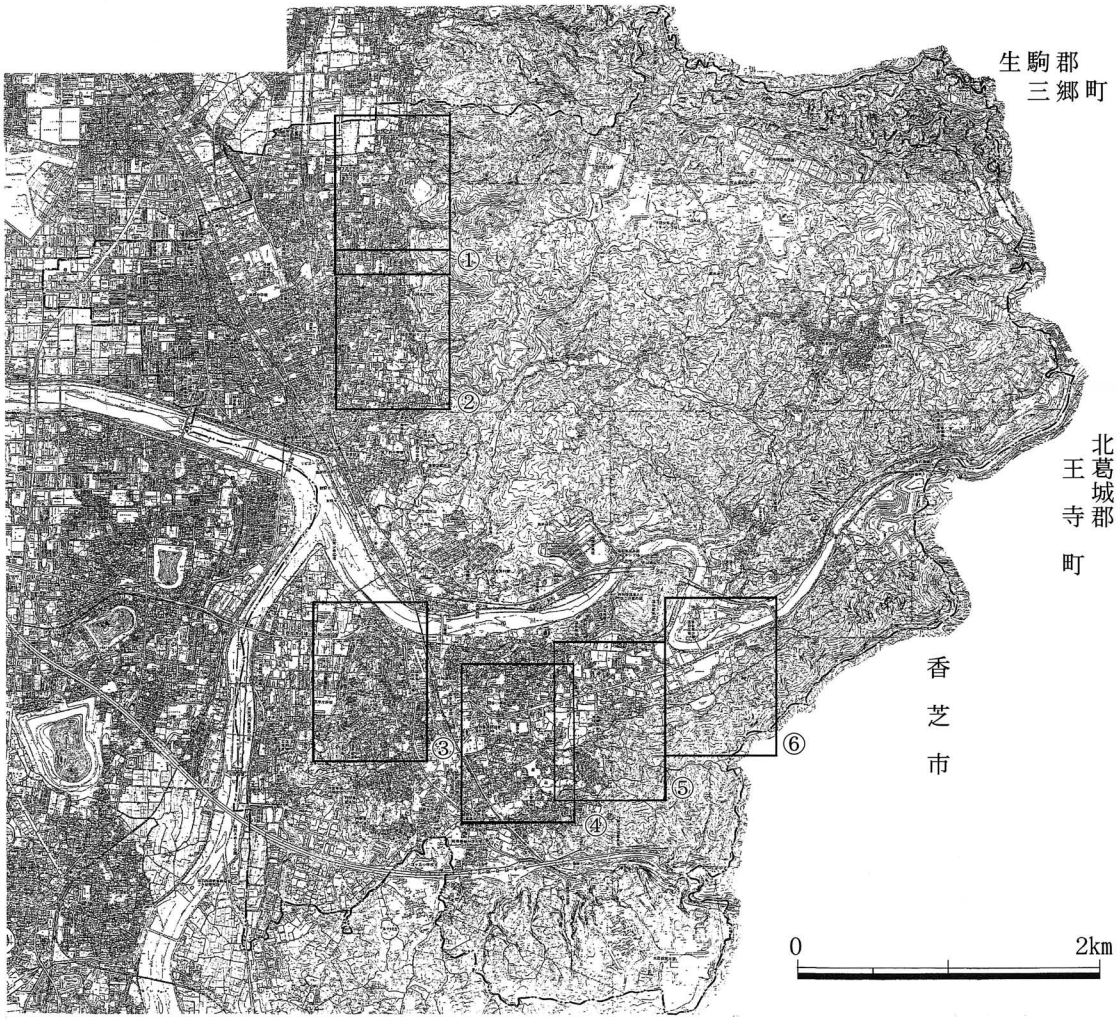


図１　柏原市位置図

第１章　平野遺跡

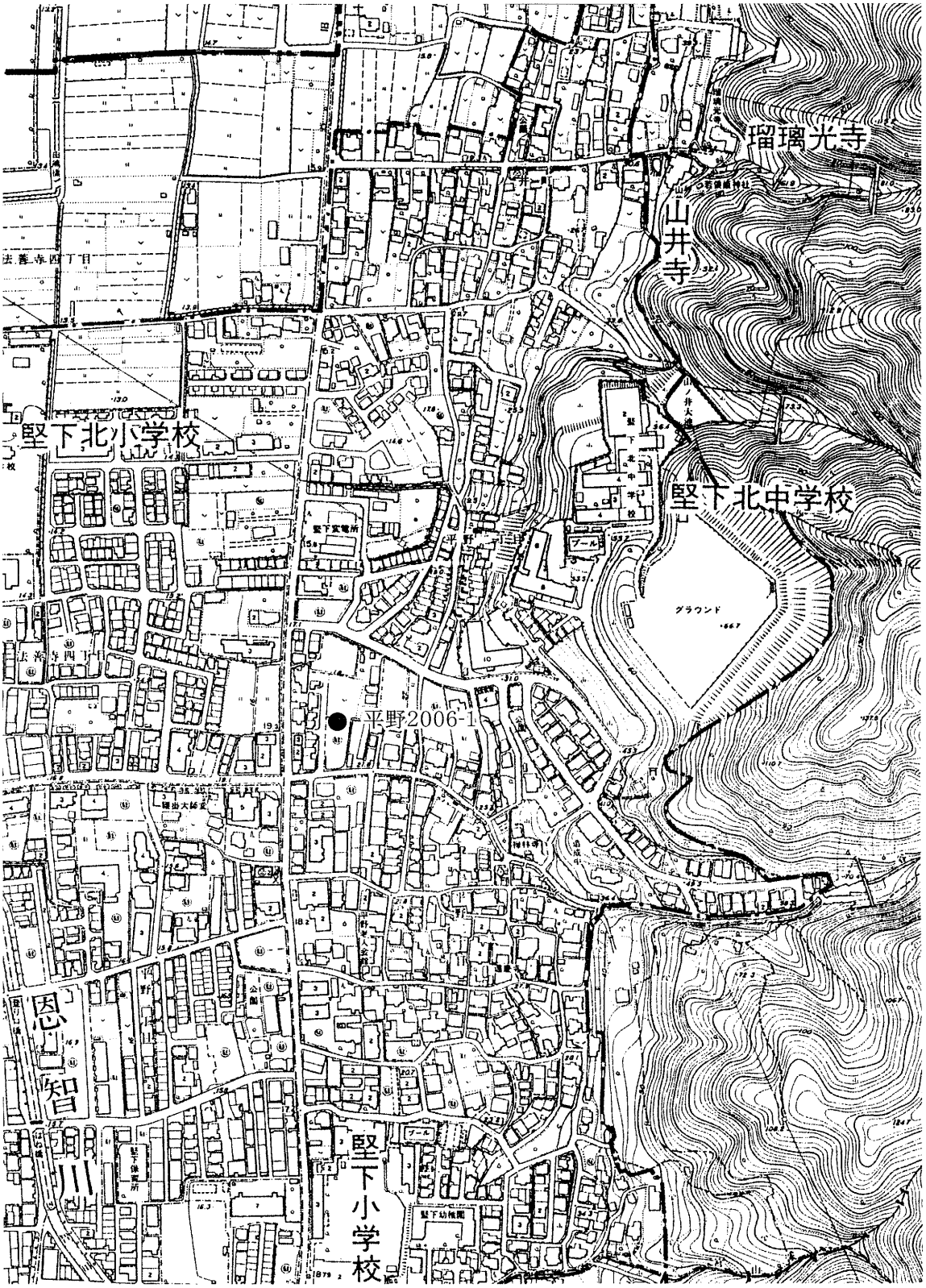


図２　調査地位置図（S＝１／5000）

平野遺跡　2006-1次調査

・調査対象地　　平野2-472/473-1/473-3/474

・調査期間　　2007年1月31日

・調査面積　　0.96㎡

・調査担当者　　石田成年、島内洋二

平野遺跡は、柏原市の北端部に近く位置し、生駒山地の南端部にあたる東山の山麓に広がる扇状地に立地している。西は恩智川、東は東山山地、南は谷山渓、北は山麓部に築かれた尾池（貯水池）から西流する川筋によって限られており、東西・南北ともおよそ 400mの範囲に広がっている。縄文時代から始まる複合遺跡であり、縄文時代では遺跡南縁部の谷山渓周辺で晩期の居住域が知られているが、弥生時代になると居住域は遺跡中央部に移るようである。また、遺跡中央部を南北に貫いて東高野街道が延びている。

調査地は遺跡のほぼ中央部に位置し、西側におよそ30m離れて東高野街道が通っている。なお、調査地の標高はおよそ20mである。

調査では、対象地の北西隅に1.2 × 0.8mの調査区を設定し、現地表下 1.2mまで掘削したが、遺物、遺構とも検出されなかった。

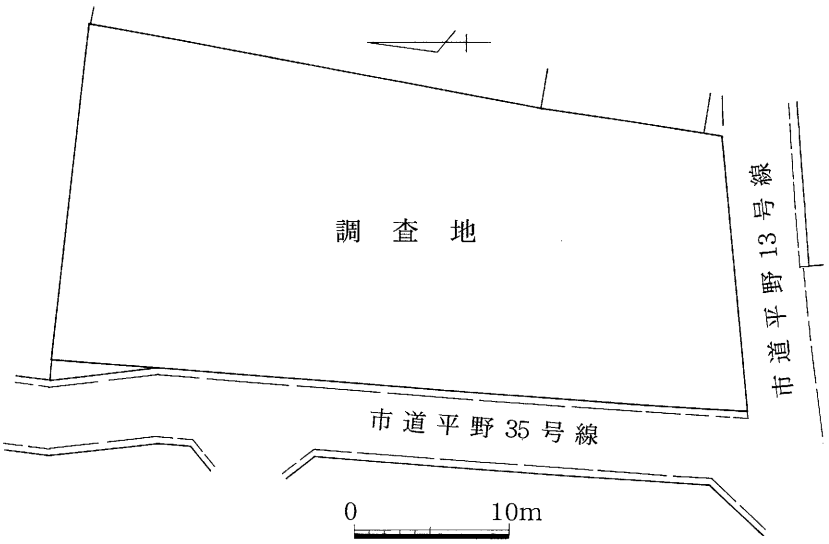


図３　調査地現況図

第２章　大県南遺跡、大県南廃寺

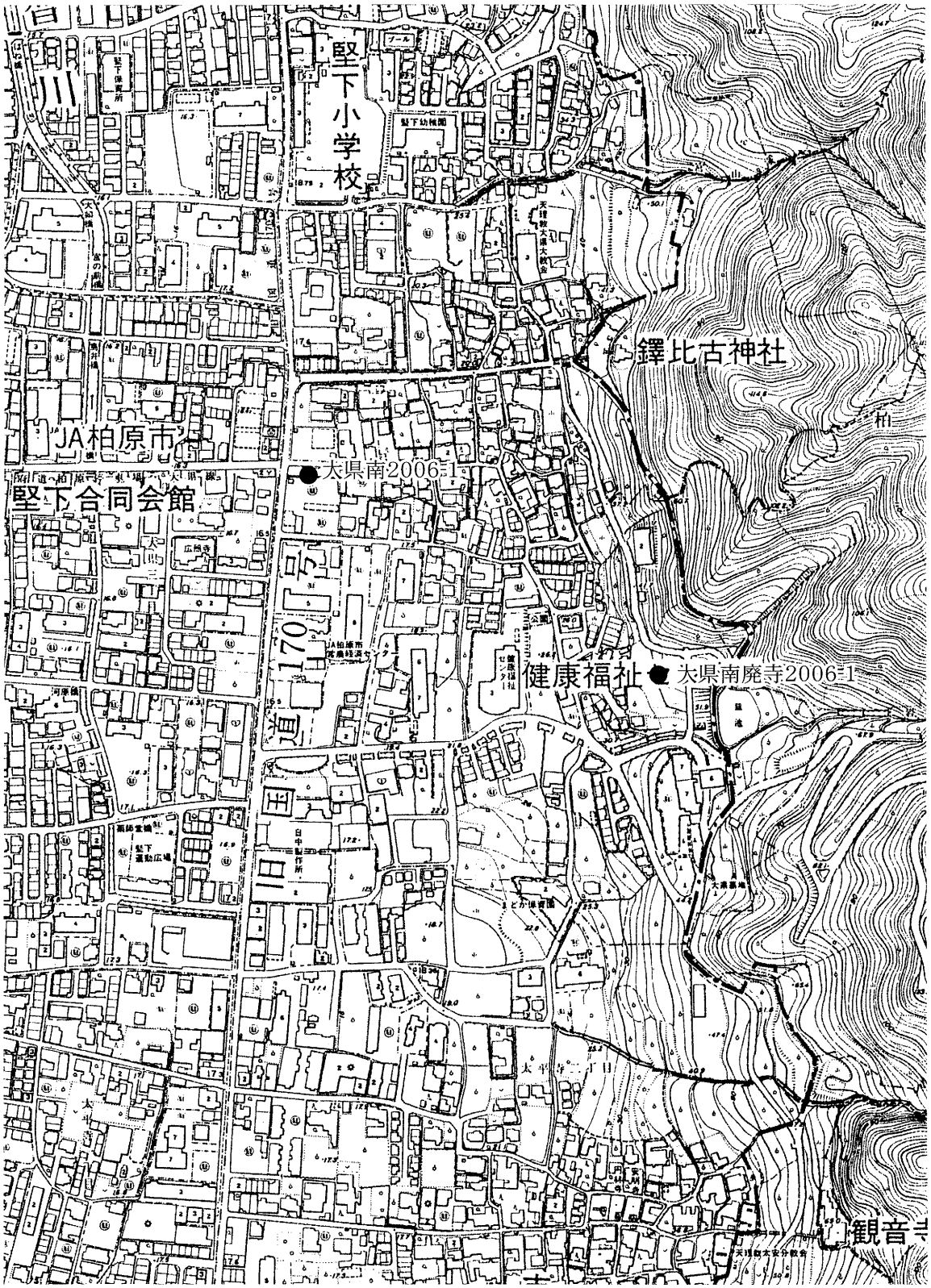


図４　調査地位置図（S＝１／5000）

大県南遺跡　2006-1次調査

・調査対象地　　大県4-160-5

・調査期間　　2006年10月3日

・調査面積　　4.00㎡

・調査担当者　　石田成年、島内洋二

大県南遺跡は、東山山地の西麓に形成された岩崎谷から西流する川筋の北・南に広がっている。遺跡の範囲は東西方向がおよそ500m、南北方向がおよそ400mで、地形的には、東側の山麓斜面から緩やかに西に傾斜して恩智川右岸の低平地に及んでいる。旧石器時代から遺物の出土が知られているが、本格的に集落が営まれるようになるのは古墳あるいは飛鳥時代以降である。こうした集落から出土する遺物の中にはガラス玉の鋳型なども含まれており、何らかの工房も少なからず営まれていたらしい。なお、遺跡の西半部を東高野街道が南北に貫いているが、こうした街道沿いには中世以降の集落も営まれていた。

調査地は遺跡の北端部に位置し、形状は東西に長く、その西辺は東高野街道に面している。地形は平坦で、標高はおよそ17.0mを測る。調査では、対象地のほぼ中央に2.0 × 2.0mの調査区を設定し、現地表下50cmまで掘削した。最深部には現代の廃棄物である黒い帯状の貝殻層が広がっており、遺物・遺構は検出されなかった。

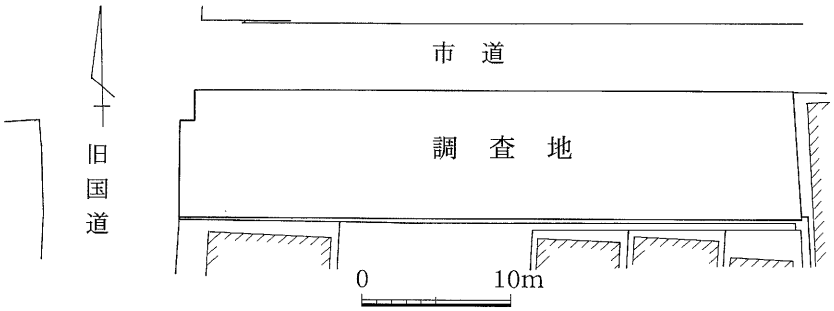


図5　調査地現況図

大県南廃寺　2006-1次調査

・調査対象地　　大県4-467-1/他６筆

・調査期間　　平成18年10月4日

・調査面積　　6.00㎡

・調査担当者　　石田成年、島内洋二

大県南廃寺は大県南遺跡の東半部に位置している。寺院に関連する遺構は見つかっていないものの、大量の瓦を含む整地層が検出されており、山麓の斜面を削って伽藍地を整えた小規模な寺院だったらしい。瓦には、素弁・単弁・重弁・複弁・忍冬蓮華文の軒丸瓦、素文・重弧文の軒平瓦、格子目叩き平瓦などがあり、他に緑釉の丸瓦なども出土している。軒丸瓦の単弁蓮華文は花弁の中に子葉が見られるもの、忍冬蓮華文は忍冬文が陰刻されたものであり、これらの瓦から７世紀中頃から後半の年代が考えられている。なお、大県南廃寺は『続日本紀』に記された河内六寺の一つ「山下寺」と推定されている。

調査地は推定寺域の北東部に位置している。調査では、対象地中央部の南寄りに6.0 × 1.0mの調査区を設定し、現地表下 1.2mまで掘削した。およそ 1.1mで地山を検出し、遺物・遺構とも認められなかった。

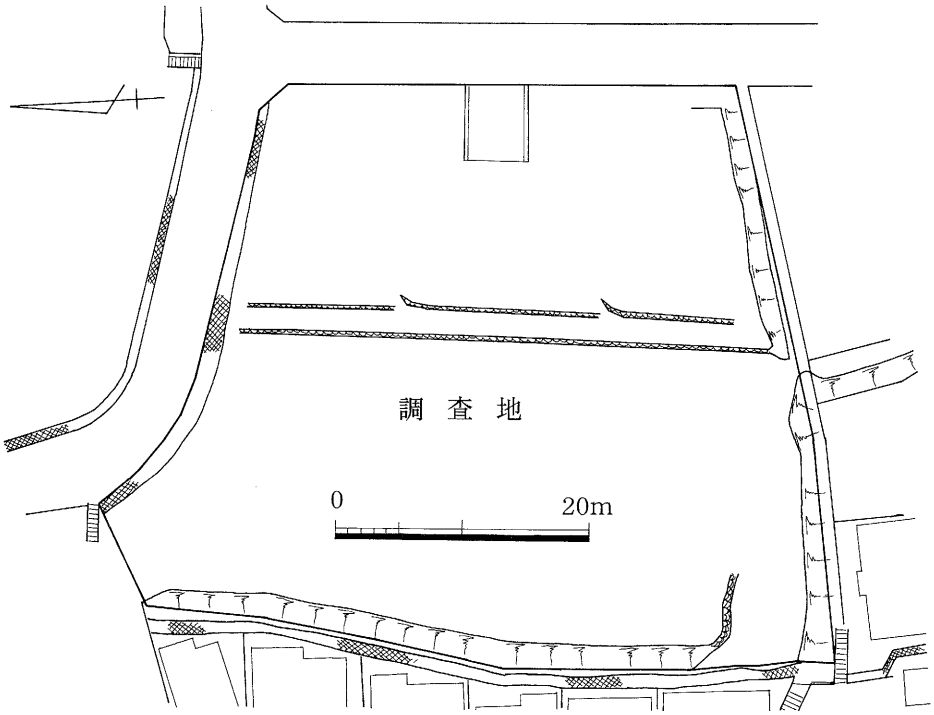


図６　調査地現況図

第３章　玉手山遺跡

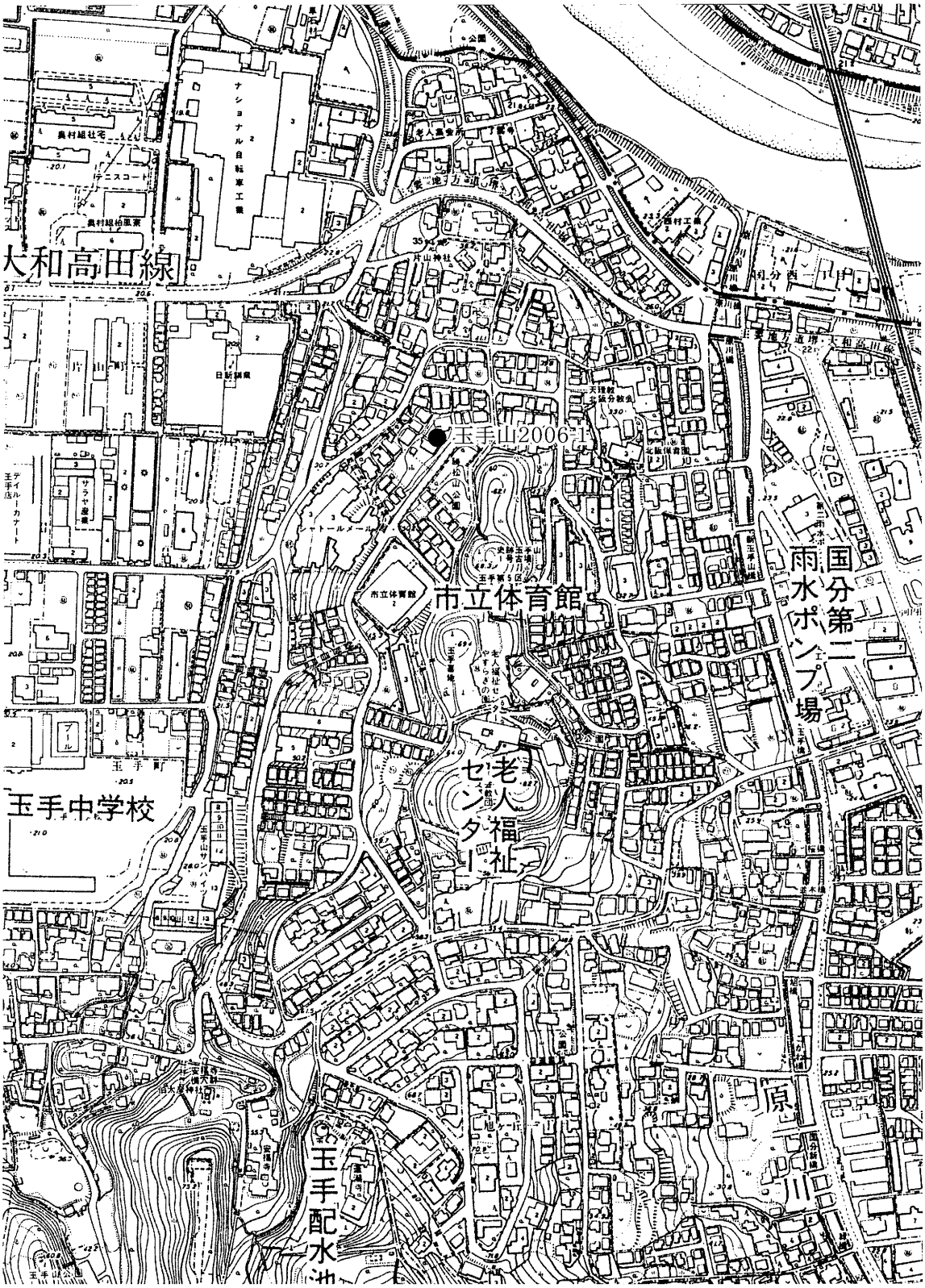


図７　調査地位置図（S＝１／5000）

玉手山遺跡　2006-1次調査

・調査対象地　　玉手町115-192

・調査期間　　2007年3月7日

・調査面積　　3.00㎡

・調査担当者　　桑野一幸、島内洋二

玉手山遺跡は、前期の古墳群（玉手山古墳群）が営まれた玉手山丘陵全域をカバーするように設定されており、東西１km×南北２kmの広範囲に及んでいる。東側には奈良県香芝市の関屋盆地から流れ出す原川が、北側には大和川が、西側には石川が流れ、標高およそ60～100mの独立丘状を呈しており、河内の平野部どこからでも望見することができる高まりである。

遺跡では、古くは旧石器時代の遺物が知られているが、弥生時代になると中・後期の集落が南西部の山裾や丘陵上に営まれるようになる。古墳時代には前期～後期の古墳が築造されており、古代には南西部の山裾に安宿郡郡衙があり、中世には北西部の山裾に土豪の居館が営まれていたらしい。また、玉手山丘陵は豊臣と徳川の最後の戦いとなった「大坂夏の陣」の激戦地でもある。

調査地は玉手山遺跡の北西部に位置し、標高40～50mの丘陵西側斜面に立地している。調査では、対象地のほぼ中央に3.0 × 1.0mの調査区を設定し、地表下およそ50cmまで掘削・精査した。しかし地層は全て現代の盛り土であり、遺物・遺構は認められなかった。

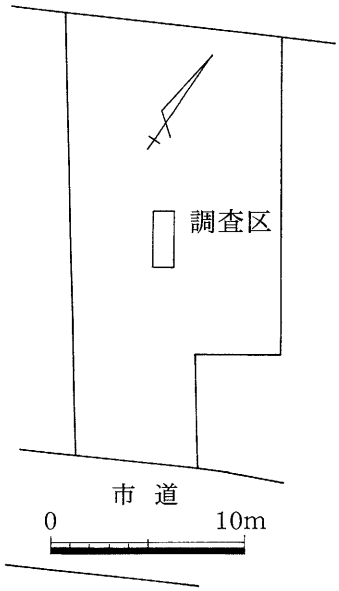


図８　調査区位置図

第４章　田辺遺跡

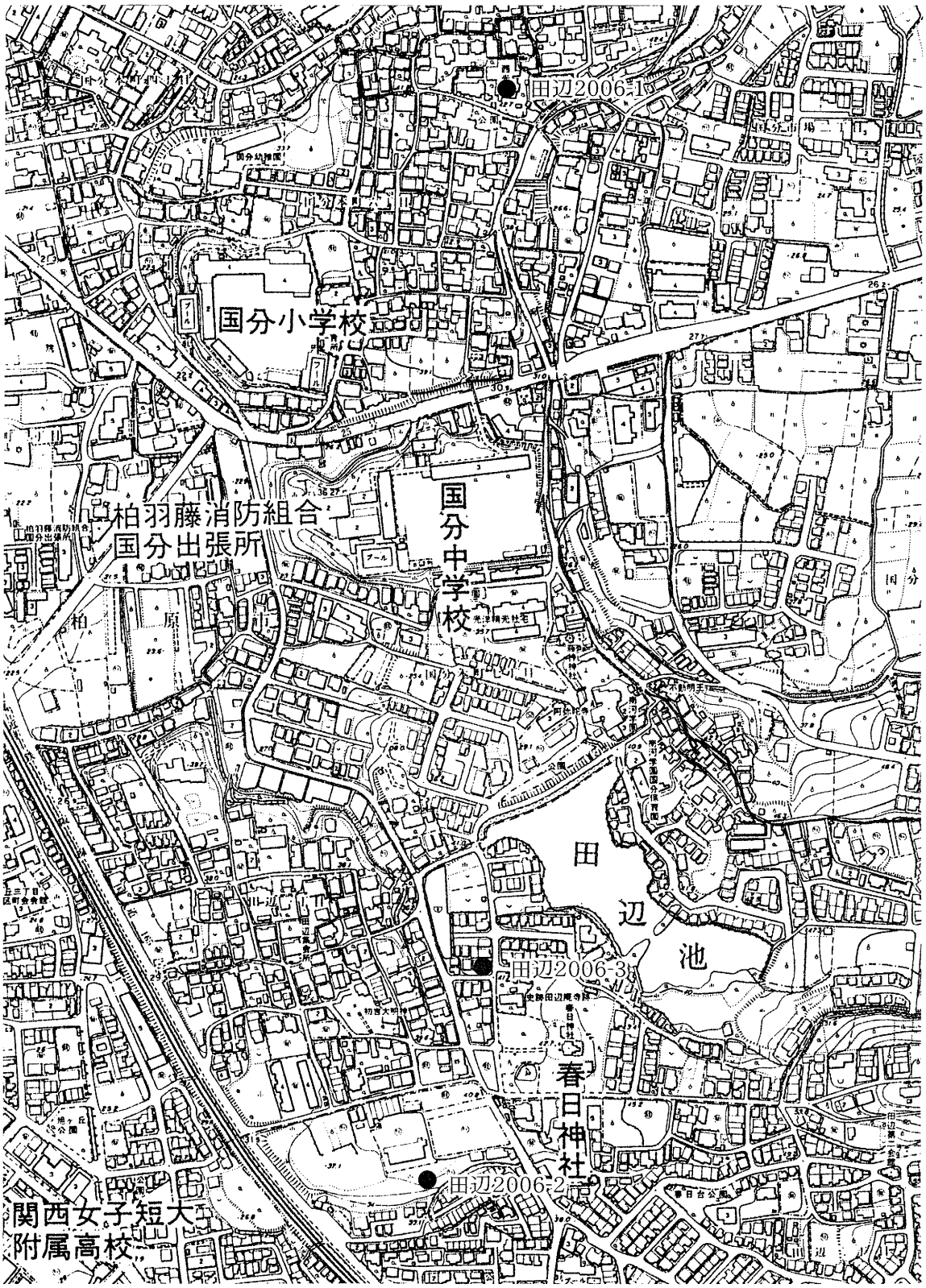


図９　調査地位置図（S＝１／5000）

田辺遺跡　2006-1次調査

・調査対象地　　国分本町6-1481

・調査期間　　2006年5月26日

・調査面積　　4.00㎡

・調査担当者　　石田成年、島内洋二

田辺遺跡は柏原市の南部に位置し、大阪と奈良の府県境にあたる明神山地から北に派生した台地に立地している。台地の東側は大和川が形成した沼沢地を江戸時代に開発した低平地、北側は大和川、西側は奈良県香芝市の関屋盆地から流れ出した原川右岸の低平地になっている。台地の中央部には西に開谷する小谷があり、谷口を堰き止めて灌漑用の溜池（田辺池）が造られているが、最近はこの谷筋も埋め立てられ、住宅地として開発が進んでいる。

田辺遺跡では古墳時代以前の様相は明らかではないが、飛鳥時代以降になると、遺跡の南半部にあたる田辺池周辺や谷筋で瓦窯や鉄滓・銅滓など工房関係の遺物・遺構が急増する。遺跡周辺は、古代には渡来系氏族である田辺史氏の本貫地とも目されており、こうした工房についても田辺史氏の職掌との関連が指摘されている。また、その氏寺や塋域とされる田辺廃寺や田辺古墳群・墳墓群も知られている。一方遺跡北半部の様相は、今までのところあまり明らかになってはいない。

調査地は遺跡の北半部に位置し、標高40m程の台地上である。調査区は4.0 × 1.0mの大きさで、現地表下90cmまで掘削、精査した。地山は現地表下20cmで検出され、遺物・遺構は認められなかった。

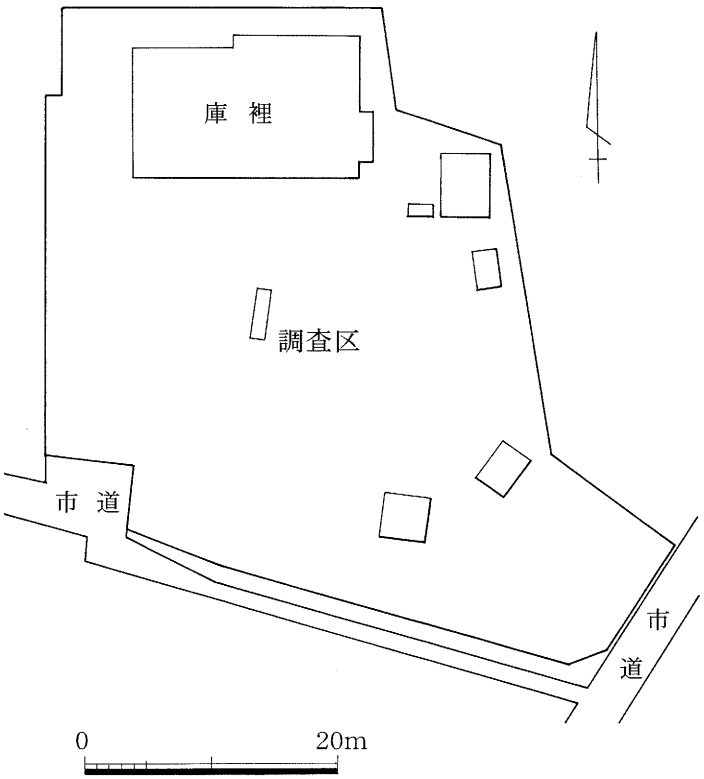


図10　調査区位置図

田辺遺跡　2006-2次調査

・調査対象地　　田辺2-1291-1/他７筆

・調査期間　　2006年12月28日

・調査面積　　3.00㎡

・調査担当者　　石田成年、島内洋二

調査地は遺跡の南西部に位置し、台地上の平坦面と台地から南に下る斜面の変換点に立地している。田辺史氏の氏寺と目される国史跡・田辺廃寺から南西に 150m程離れた場所で、標高は35m前後である。

調査では6.0 × 0.5mの調査区を設定し、現地表下 1.0mまで掘削した。表土下すぐに地山が検出され、遺物・遺構は認められなかった。

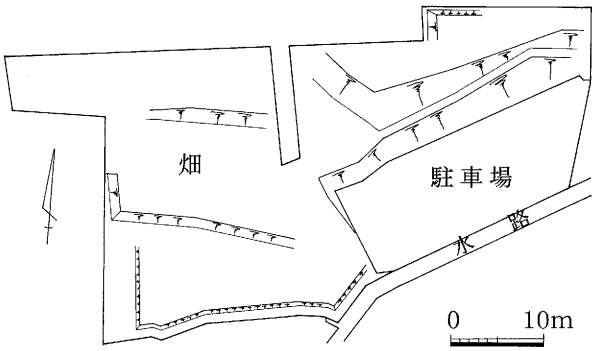


図11　調査地現況図

田辺遺跡　2006-3次調査

・調査対象地　　田辺1-322-8

・調査期間　　2007年1月20日

・調査面積　　1.50㎡

・調査担当者　　石田成年、島内洋二

調査地は遺跡の南部に位置し、現在田辺池になっている谷の西側の台地上に立地している。

国史跡・田辺廃寺の北西50m程の場所で、標高はおよそ40mを測る。

調査では、対象地の南辺に1.5 × 1.0mの調査区を設定し、現地表下 1.0まで掘削、精査した。表土層の下すぐに地山が検出され、遺物・遺構は認められなかった。

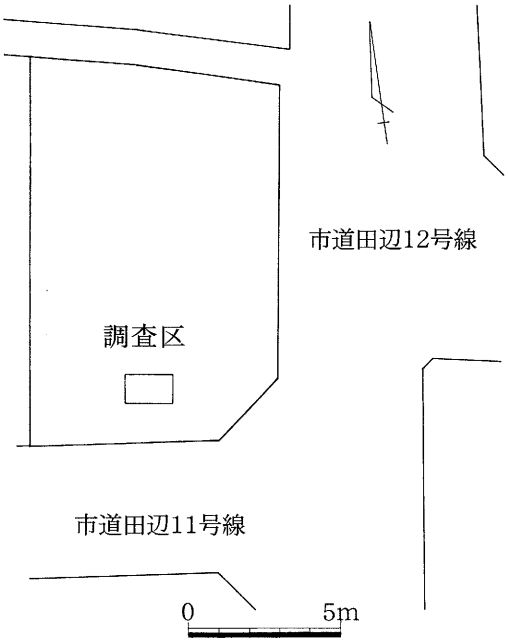


図12　調査区位置図

第５章　河内国分尼寺跡

図13　調査地位置図（S＝１／5000）

河内国分尼寺跡　2006-1次調査

・調査対象地　　国分東条町2601-1の一部

・調査期間　　2006年８月7日

・調査面積　　1.50㎡

・調査担当者　　石田成年、島内洋二

河内国分尼寺跡は柏原市の南部に位置し、東側を大和川で、西側を国分の台地で、南側を明神山地で、北側を芝山で画された低平地に立地している。この低平地は、古くは三方を丘陵地で囲まれた凹地状の地形に蛇行する大和川が流入して形作られた沼沢地であり、そうした土地を江戸時代初頭に干拓して耕作可能な土地に転換したものである。国分尼寺は、おそらく、そうした沼沢地に向かって南側の山地から派生した低い段丘に立地していたものと考えられる。

この場所を国分尼寺跡と推定している理由は、「尼寺」という小字名が残っていることと、小規模な発掘調査によって河内国分寺と類似した軒丸瓦が出土していることとに基づいており、現在までのところ寺院の建物を示すような明確な遺構は確認されていない。加えて、その軒丸瓦についても、河内国分寺塔跡の発掘調査で前身寺院の瓦とされた奈良時代前期の複弁蓮華文や、奈良時代の重圏文などであり、今のところ河内国分寺の主体となる青谷式軒丸瓦（複弁七葉蓮華文）は確認されていない。

調査地は推定されている寺域の東辺にあたり、調査では対象地の東半部に1.5 × 1.0mの調査区を設定し、現地表下60cmまで掘削、精査した。地表下およそ40cmで地山が検出され、遺物・遺構ともに確認されなかった。

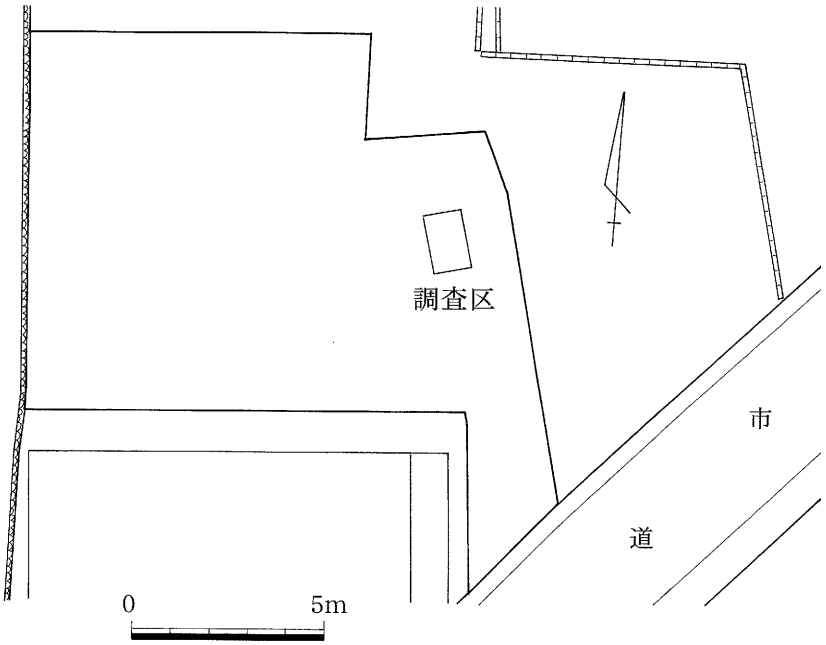


図14　調査区位置図

河内国分尼寺跡　2006-2次調査

・調査対象地　　国分東条町2583-4

・調査期間　　2006年10月12日

・調査面積　　3.00㎡

・調査担当者　　石田成年、島内洋二

調査地は推定されている寺域の北辺部に位置しており、標高は25m程を測る。調査地の北側は一段低くなっており、およそ50m離れて国道25号線が東西に延びている。この国道の周辺は、現在では宅地として開発が進んでいるが、かつては水田が広がっていたもので、国道の南側に沿って地形の変化するラインが想定される。

調査においては、対象地の南東隅に2.0 × 1.5mの調査区を設定し、地表下 1.2mまで掘削、精査した。最下層で地山が検出されたが、地表から地山まで全て近・現代の盛り土であった。また、遺物・遺構は確認されなかった。

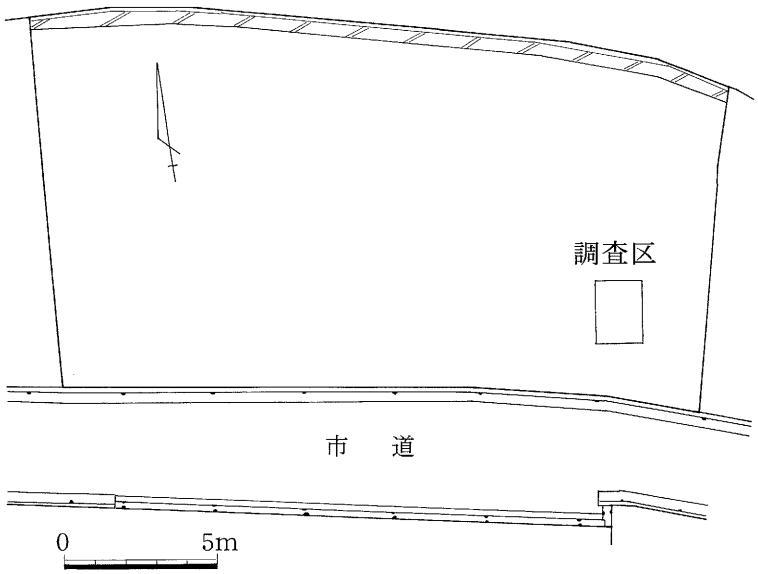


図15　調査区位置図

第６章　河内国分寺跡

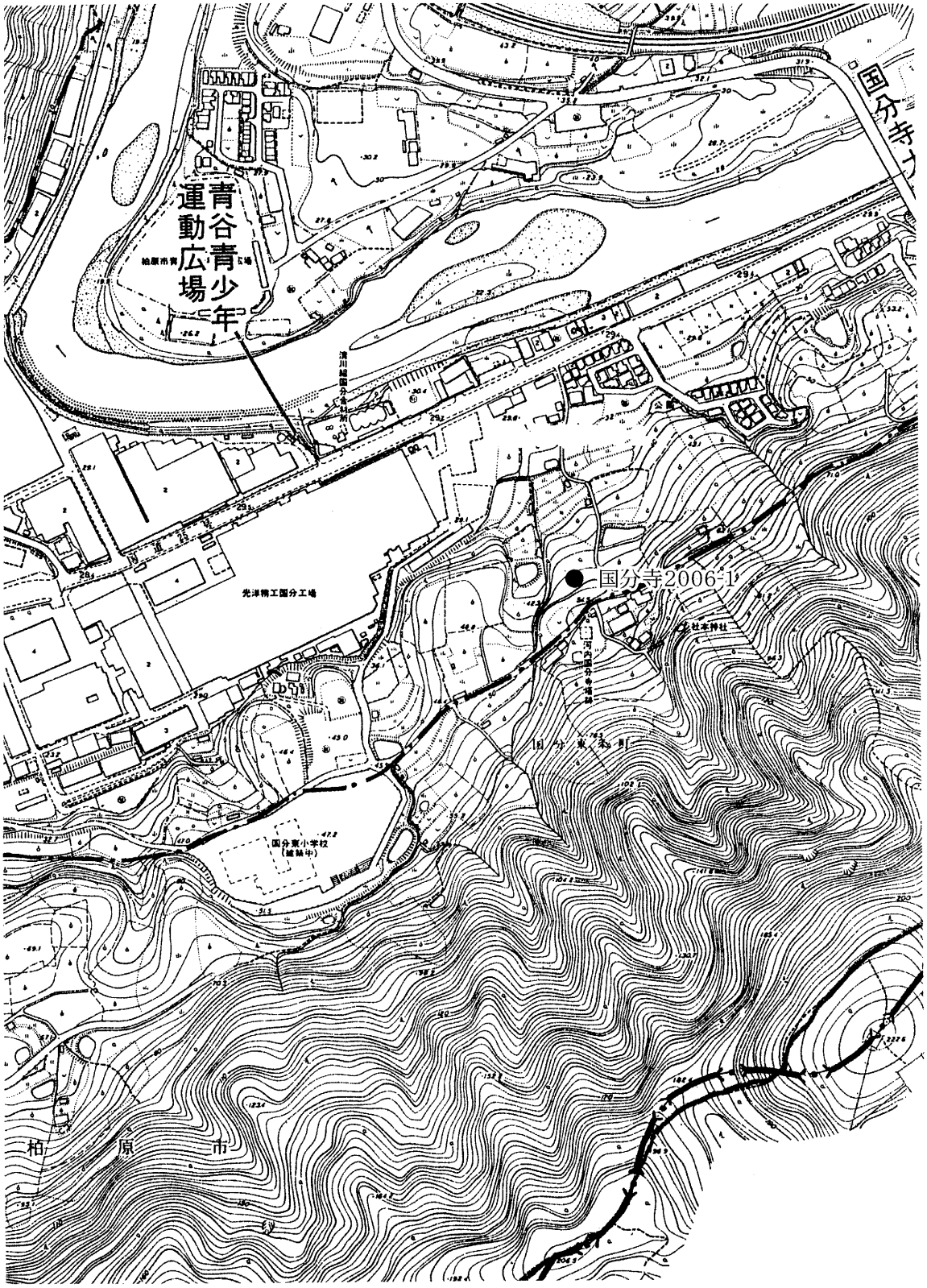


図16　調査地位置図（S＝１／5000）

河内国分寺跡　2006-1次調査

・調査対象地　　国分東条町3898/他19筆

・調査期間　　2006年12月7日～2007年4月10日

・調査面積　　57.15㎡

・調査担当者　　桑野一幸、島内洋二

1.調査に至る経緯

河内国分寺については、その塔跡のみが古くから知られ、発掘調査や基壇の整備が行われているものの、金堂や講堂をはじめ伽藍を構成する建物の多くは、その位置や存在すらはっきりしていないのが現状である。その要因として、一つには、寺院が山地斜面に立地しており国分寺の伽藍配置に対する既存の概念が適用し難いという点が挙げられる。また、当該地では葡萄のハウス栽培を中心として蜜柑やスモモなどの果樹が盛んに生産されており、発掘調査は言うに及ばず、分布調査や詳細な地形測量が困難であることも挙げられよう。

今回、土地所有者のご好意により塔跡北側の地域で発掘調査の同意が得られたため、平成18年度事業として範囲確認調査を実施することにした。なお、塔基壇の北西角を削り東西に延びる農道に接する平坦面は、やはり今回同意が得られた範囲に属しているが、ここについては平成19年度に調査を実施することにした。

2.位置と環境

河内国分寺跡は柏原市の南東部に位置し、眼下を流れる大和川を辿ると約2㎞で大阪・奈良の府県境に至る。古代には河内国安宿郡資母郷に当たり、河内国府と推定される藤井寺市国府からは、直線距離で東南東に約4㎞離れている。また、奈良時代に聖武・孝謙帝がしばしば滞在した竹原井離宮（行宮、頓宿）に推定される青谷遺跡とは指呼の距離にあり、その中心建物とされる遺構からは、大和川を挟んで南南東に僅か400mを測るに過ぎない（図１・16）。

この河内国分寺跡は、大阪・奈良の府県境に連なる明神山地から大和川に向けて派生した台地上に立地している（図17）。通常、国分寺の主要伽藍域は２町四方とされるが、この場所ではそうした広がりをもつ平坦面を望むべくもなく、国分寺としては極めて異例な立地である。ちなみに塔跡の標高は約55m、山裾と大和川の間を通る国道25号線周辺の標高は約30m、大和川水面の標高は約20mであり、現状では大和川水面と国分寺塔跡の標高差は約35mを測る。奈良時代、ここに高さ約50mの七重塔が建っていたとすれば、水面あるいは河原から仰ぎ見た場合、相当な威容であったと想像することができる。

なお塔跡については、現在では地形がかなり改変されているものの、かつては山襞を形作る小さな谷の斜面を整形して塔域の平坦面が造成されていたようにも思われる。その場合、小谷を流れ下る水・土砂・巨石など土砂や土石に対する備えとして、流路を付け替えるなど相応の土木工事が行われていた可能性も考えられる。

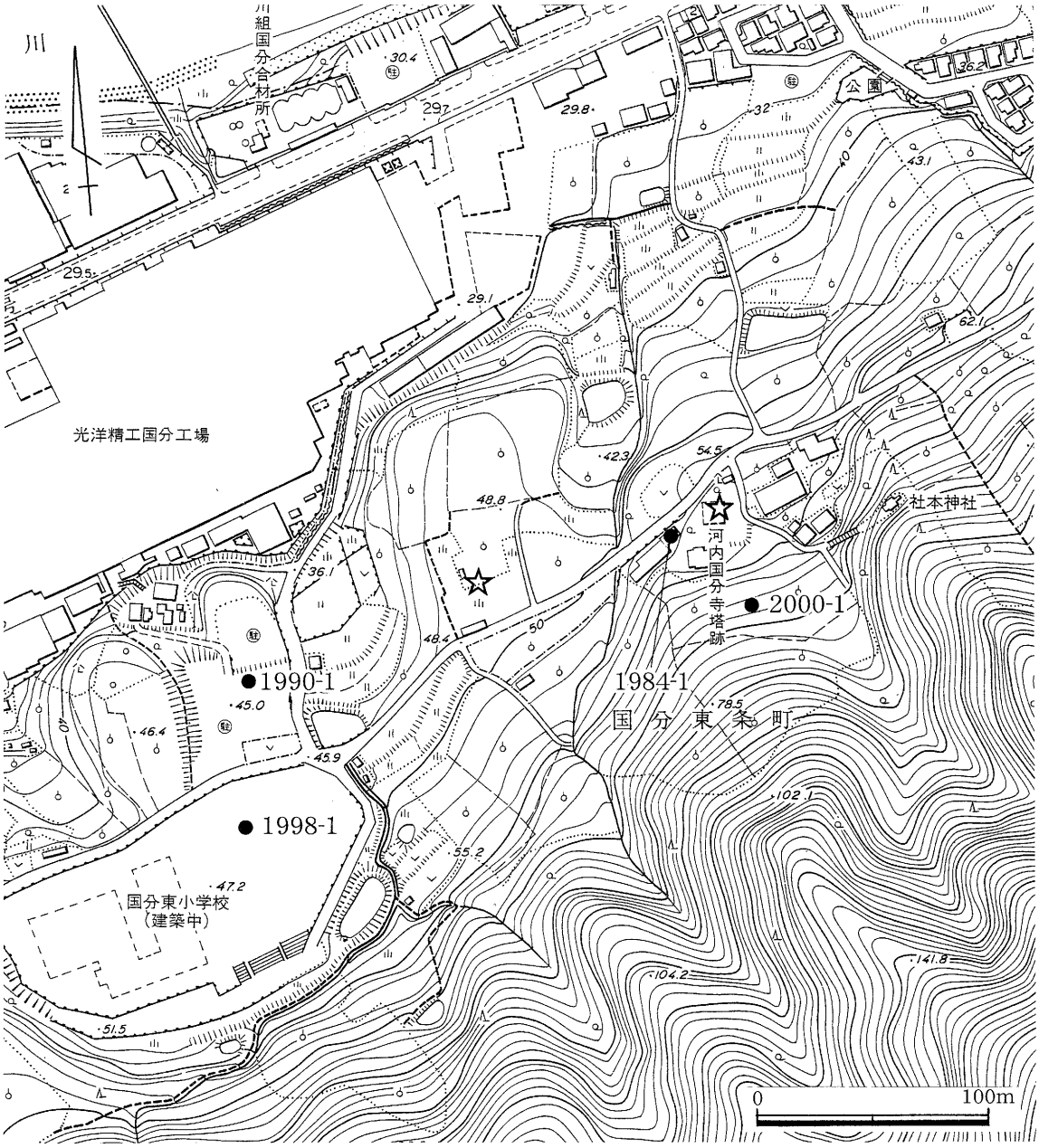


図17　周辺の地形と既往の調査（☆：大阪府　●：柏原市）

3．既往の調査

河内国分寺跡は、地名に由来する東条（ひがんじょ）廃寺或は杜本（とのもと）廃寺として古くから知られていた。ところが大正の頃から礎石が運び出されるようになったため、昭和９・10年に大阪府が調査を行い、壮大な塔の跡が確認されて「謎の河内国分寺の発見」とマスコミでも大いに喧伝されたが、調査報告の公開には至らなかった。その後昭和45年に大阪府教育委員会によって再び塔跡及び周辺地の発掘調査が行われ（図17）、塔基壇の規模や構造、また金堂院の中門と推定される遺構の存在が明らかになり、藤沢一夫氏による文献研究の成果と相俟って、現在ではこの廃寺をもって河内国分寺跡と認定されている。

昭和45年の発掘調査によると、塔は凝灰岩切石を組み合わせた壇上積基壇で、その一辺は約19

m、高さ1.54m、６段の階段が四方に付き（西側は未確認）、基壇上面を方形凝灰岩で四半敷きするという美麗な姿であった。花崗岩の礎石は心礎も含めて６石遺存し、その位置から塔軸部初層は一辺10.36m四方と推定された。さらに谷を隔てた西側の台地上では、塔の中心から南へ約25m、西へ約84～104mの地点で、クランク状に屈曲する凝灰岩石列と小石敷が検出され、北側に金堂、講堂を配した金堂院の中門と推測された。

瓦は軒丸瓦９種、軒平瓦９種が出土した。この中で、奈良時代中頃の瓦として平城宮系の複弁七葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦の組み合わせが注目され、河内国分寺式と呼ばれたが、現在では竹原井離宮とされる青谷遺跡所用の瓦と見做されて青谷式と称されている。また、その窯跡が河内国府周辺部に当たる応神陵古墳外堤で発見されている。その一方で、片岡王寺系、岡寺系、薬師寺系など白鳳～奈良時代前半に遡る瓦もあり、前身寺院の存在が推定されることにもなった。

その後、柏原市教育委員会によって1984-1次・1990-1次・1998-1次・2000-1次調査などが行われ、推定される中心伽藍から西側の地域に当たる1990-1次調査では、僅かながらも方形掘り方の柱穴が確認されている（図17）。加えて地形や遺物の採集状況から推測すると、中心伽藍から東側の地域でも建物が存在した可能性もある。このように河内国分寺については、中心伽藍を構成する建物に加えて寺院を維持・管理するための諸施設など未解明な部分が殆んどであり、より一層の調査の進捗が望まれる。

４．調査

ａ．調査地の地形

今年度における範囲確認調査の対象地は、塔跡北側の北に下る斜面地である（図18）。標高は、南側の最高所で約50m、北側の最も低い所で約44.5mを測る。ちなみに、塔基壇を覆うように造られた復元基壇上面の標高は約56.6mである。

対象地の東半分は、現在は土砂に覆われて僅かしか見えないが、石垣を組んで狭い平坦面が段々に造成されており、棚田や果樹園（スモモ）として利用されてきた。一方西半分は緩やかな斜面地であり、現在は竹林として利用されている。しかし林間には立ち枯れたスモモの老木も見られ、やはり果樹園として利用されていたらしい。

なお、対象地の南側は塔基壇に連なる一段高い平坦面であるが、その一部には、かつては溜池が存在したらしい。また、東側は葡萄畑として利用されている緩やかな斜面、北側は対象地から続く段々畑や棚田、西側は果樹園として利用されている谷になっている。

ｂ．地区割り

今回の調査では、平面位置計測の基準として塔復元基壇上の模造の礎石を利用した（図18）。すなわち、見かけの上で最も直線的に揃っている北辺と南辺側柱の東から２つ目の礎石中心点を結び、発掘調査の結果から明らかになっている中央間（3.772m）と脇間（3.298m）の長さから復元塔基壇の中心点（模造心礎のほぼ中央）を求め、東西・南北方向の基準点（ＥＷ０、ＳＮ０）とした。この基準点については、実際の塔基壇と復元基壇の平面位置がどの程度整合しているのか検証でき

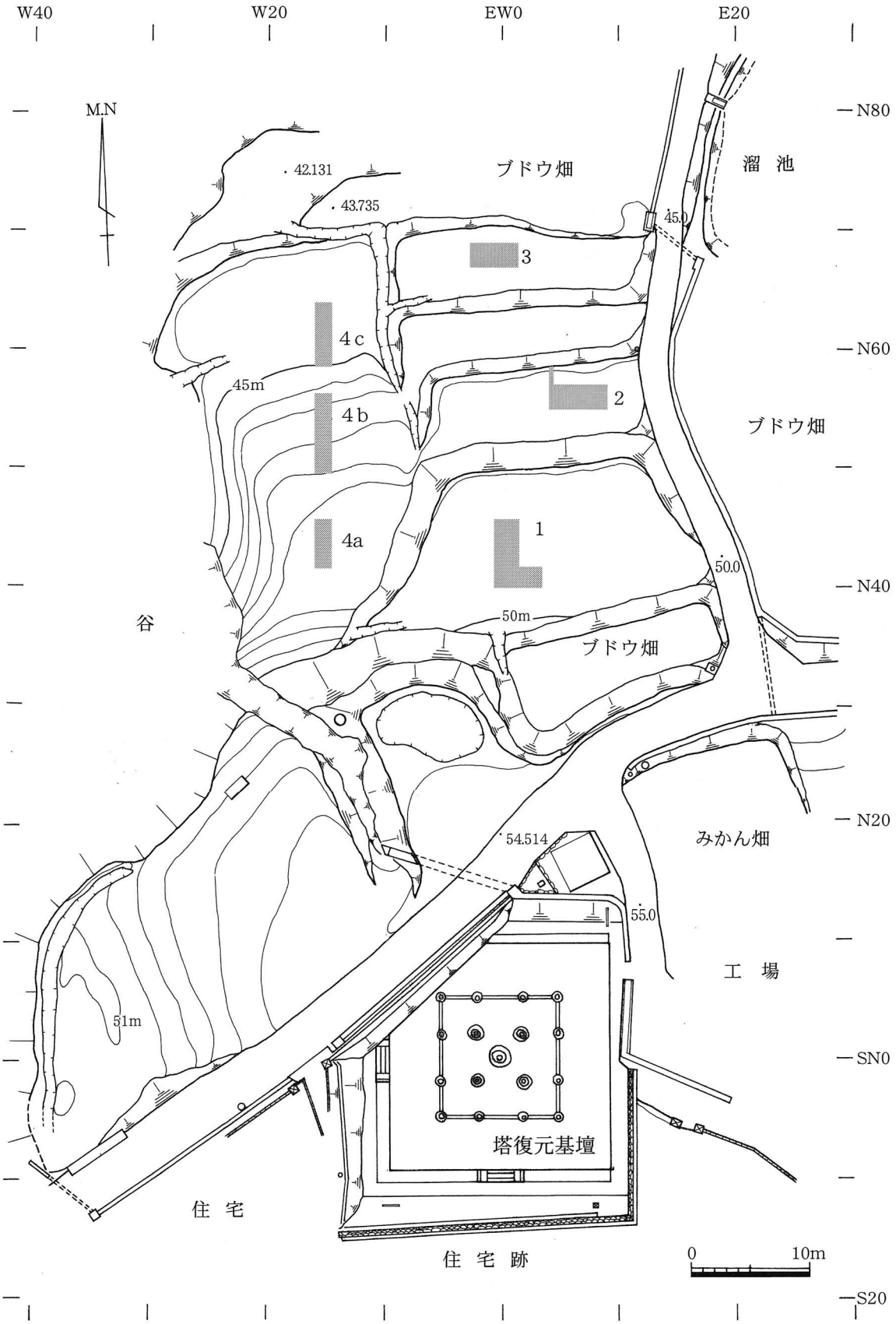


図18　調査地の現況と調査区の位置

ないため、あくまで実際の塔基壇からの平面的位置を知る上での目安の基準点であることを断っておきたい。

なお地形図における方位は磁北、標高はT.P.であり、等高線の間隔は50cmである。

c．1区（図18・19、図版11・12）

1区は、復元塔基壇の南北中軸上において、塔から北に40～45mの地点に設定したL字形の調査区である。標高は49.6～49.9mを測る。設定当初は長さ4m×幅2mの南北に長い調査区であったが、その南辺で土坑が検出されたため、南側に長さ4m×幅2mの東西方向に長い調査区を付け加えた。

発掘調査によると、調査区の東・西壁断面に見られる地山（19層）の傾斜が示すように、調査区周辺は北に向かって低くなる斜面地であった。そして低い部分に土を盛って整地を行い、標高49.3m～49.4mの高さで平坦面を造成し、その平坦面において土坑や溝を掘り込んでいる。この平坦面

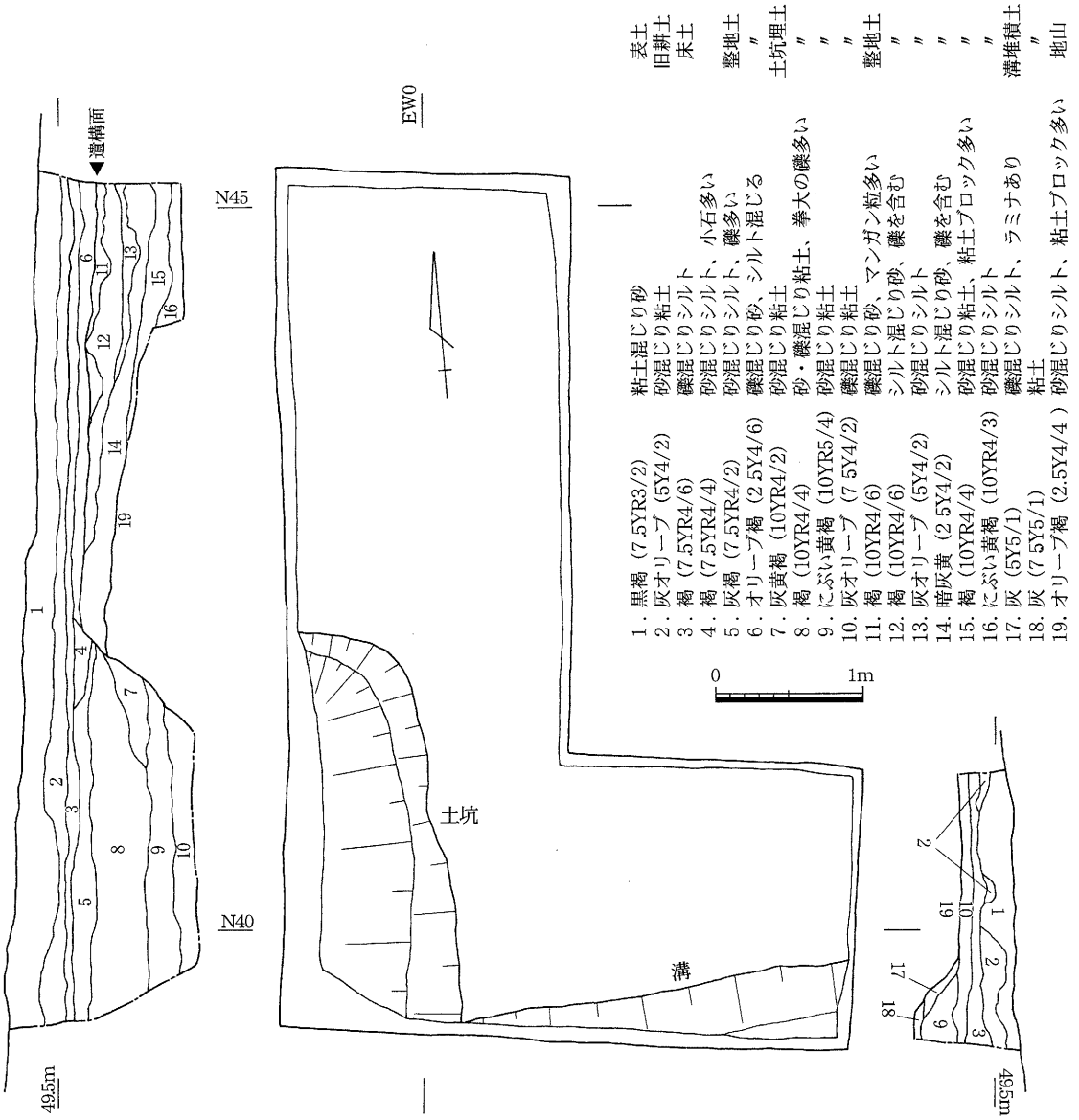


図19　1区　平面図と土層断面図

から上部については、調査区南東部の地山面における耕作土の染み込みや畝の痕跡、或は酸化鉄が強く沈着したシルト質土の全面的な広がりなどが見られ、現在の地表面も含め田・畑・果樹園（スモモ）として繰り返し利用されてきたらしい。なお、平坦面の整地土である12層から須恵器と土師器の微細片が１点ずつ出土している。

土坑は調査区の南西辺で肩部・法面の一部が検出された。底面は未検出であり、全体の大きさ・形・深さは不明である。堆積土は砂・礫を多く混入したシルトや粘土であり、古代の平瓦・土師器・陶器の小片が混在して僅かに出土した。この土坑については、堆積土の様相や遺物の出土状況からみて、近世・近代以降の溜池のような施設ではないかと思われる。

溝は調査区の南辺で一部が検出された。東西方向に走る溝で、深さは約30cm。堆積状況や遺物の

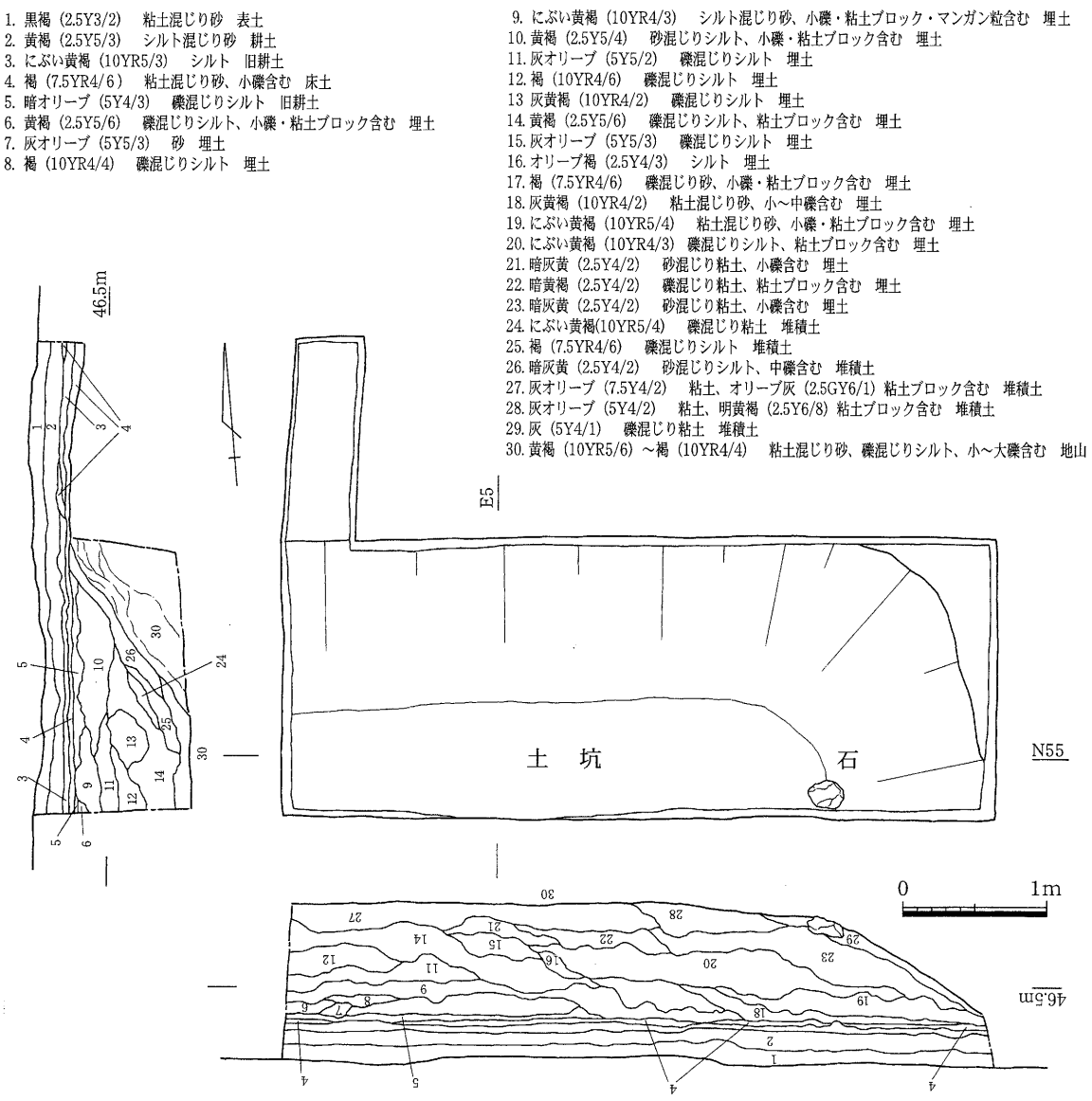


図20　２区　平面図と土層断面図

出土状況は土坑と類似しており、溜池と同じような時期に利用されたものと思われる。

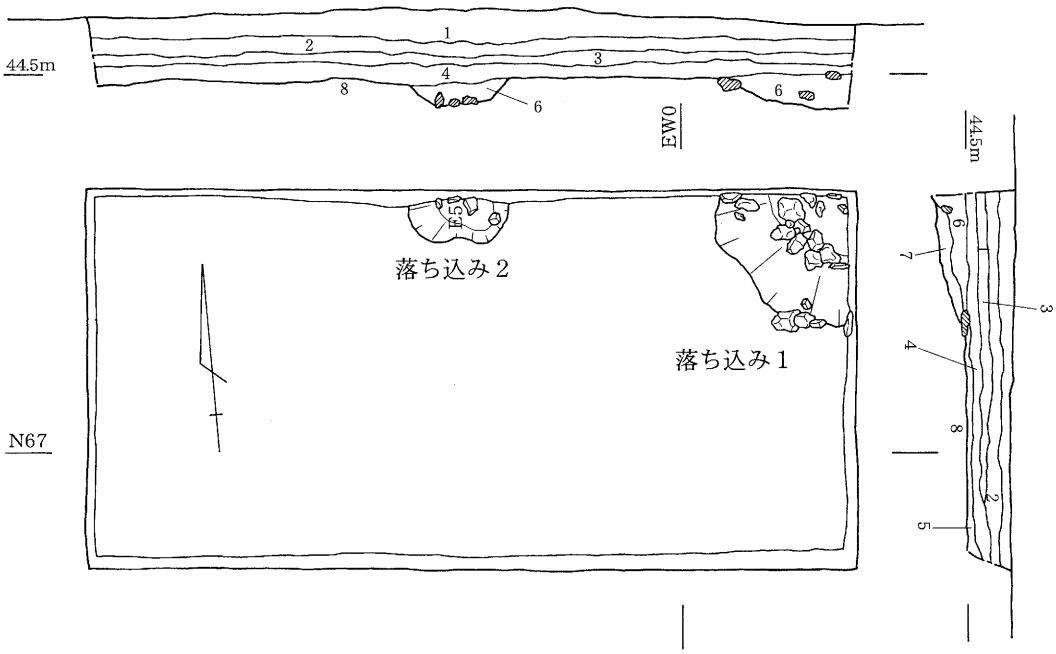
以上のように、１区では古代寺院に関わる遺構は検出されなかった。また遺物についても、古代の平瓦などの小片が整地土や耕作土から僅かに出土するに留まった。

d．２区（図18・20、図版13・14）

２区は、１区よりも１段低い北側の平坦面に設定した長さ５ｍ×幅２ｍの東西方向に長い調査区である。標高は47mを測る。塔との位置関係をみると、調査区西辺は復元塔基壇南北中軸線から東に3.5m、同じく南辺は復元塔基壇東西中軸線から北に54.6m離れている。なお西辺では、調査区を50cm幅で北に1.3m拡張した。

発掘調査によると、調査区全体が大きな土坑の一部であった。そして、この土坑が埋没した後にできた平坦面で田・畑の耕作、果樹（スモモ）の栽培が行われてきた。

土坑は、調査区壁面の断面図で示されるように地山（30層）を30度～35度の角度で削り込んで造られたものであり、深さは80cmを測る。調査範囲はその北東の一部であり、大きさ・形は不明である。堆積土には粘土質・シルト質・砂質のものが多く、種々の大きさの礫の混入も多い。遺物としては陶器や現代瓦の小片が僅かに出土したが、これらに混在して古代平瓦の小片が１点のみ認められた。この土坑については、大きさや埋没状況などからみて近世・近代の溜池のような施設であったと思われる。



1. 黒褐（5YR2/2）	砂混じりシルト	表土、耕土
2. 黒褐（2.5Y3/2）	砂混じりシルト	旧耕土
3. 暗灰黄（2.5Y4/2）	砂混じりシルト	旧耕土
4. にぶい黄褐（10YR4/3）	粘土混じり粗砂、細礫含む	床土
5. 褐（10YR4/2）	粘土、細礫含む	
6. 暗褐（10YR3/3）	砂混じりシルト、小礫・拳大礫含む	落ち込み堆積土
7. 褐（10YR4/4）	シルト混じり粘土	落ち込み堆積土
8. にぶい黄褐（10YR5/4）	砂・礫混じり粘土、拳大の礫多い	地山

図21　３区　平面図と土層断面図

このように２区においては古代寺院に関連する遺構は認められず、また古代の瓦がまとまって出土するという状況も認められなかった。

ｅ．３区（図18・21、図版15・16）

３区は、２区から北側に２段下がった平坦面に設定した長さ４ｍ×幅２ｍの東西方向に長い調査区である。標高は44.7m～44.8mを測る。塔との位置関係は、調査区の東半が復元塔基壇の南北中軸上にあり、調査区の南辺は復元塔基壇の東西中軸線から北に66.4m離れている。

地層を見ると、３区においても田・畑の耕作や果樹（スモモ）栽培が行われており、地表面から30cm或は40cmという浅い位置で平坦な地山面（８層）が検出された。

地山面において極浅い落ち込みが２箇所で検出された。落ち込み１は調査区の北東隅で検出されたが、調査区外にも広がっており、大きさ・形は不明である。深さは20cm程で、内部に亜円・亜角

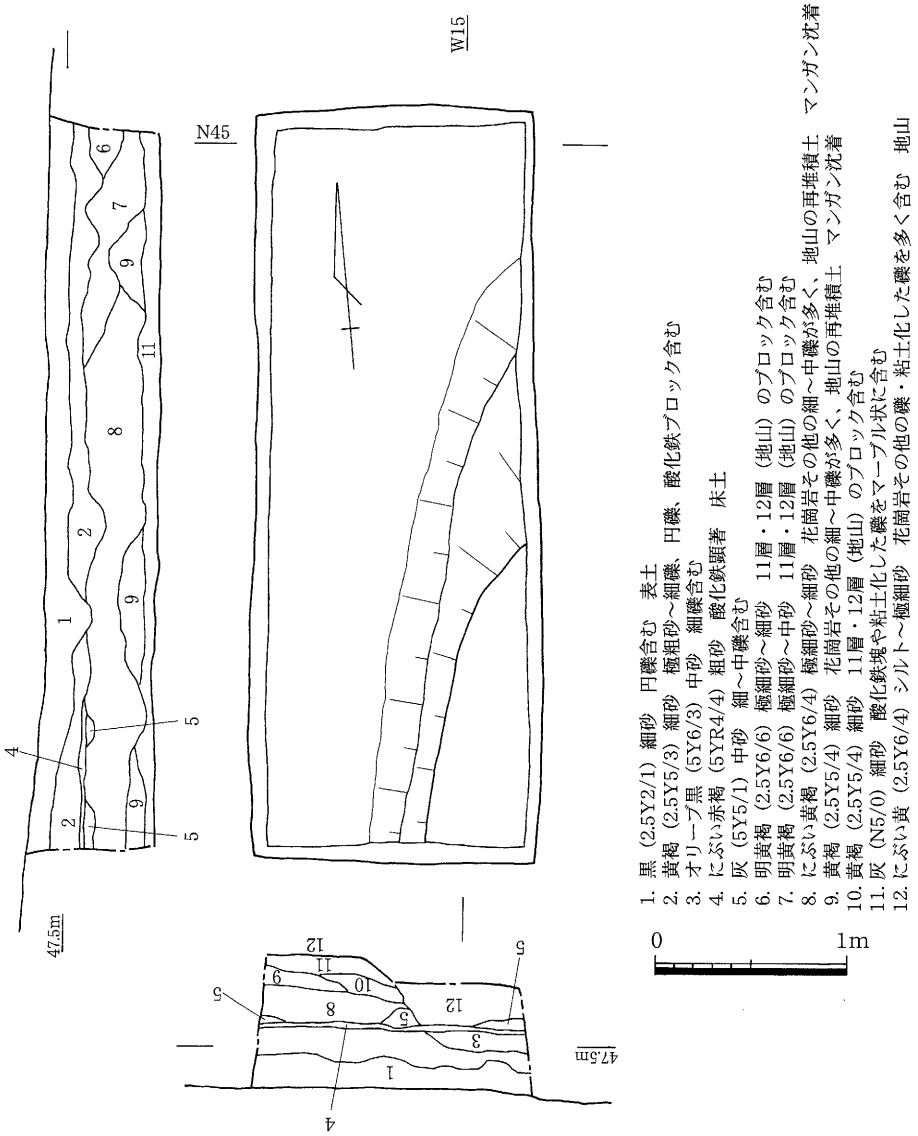


図22　4a区　平面図と土層断面図

礫が散在していた。落ち込み２は調査区の北辺中央部で検出された。落ち込み１よりは小さく、10㎝程の深さで、やはり内部には亜円・亜角礫が散在していた。

以上のように、３区においては古代寺院に関係する遺物・遺構とも検出されなかった。

ｆ．４ａ区（図18・22、図版18）

４区は調査対象地の西半分に当たる斜面地に設定した長さ22m程の南北に長い調査区である。ただし調査していない箇所もあり、実際の調査区として北から４ａ区・４ｂ区・４ｃ区と区分した。

４ａ区は長さ４ｍ×幅1.5ｍの調査区である。塔との位置関係は、調査区東辺が復元塔基壇南北中軸線から西に14.6ｍ、同じく南辺が復元塔基壇東西中軸線から北に41.2ｍ離れている。標高は47.6ｍ～47.8ｍを測り、南東側でやや高くなっているもののほぼ平坦な地形である。

地山面（12層）の地形を見ると、全体的にはほぼ平坦であるが、調査区南東部で高さ40㎝程の高まりが認められる。そして低い部分に土を盛って整地を行い、標高47.4ｍの高さで平坦面が造成されている。この平坦面には調査区南辺付近で薄い酸化鉄の沈着層が見られるが、全体としては明瞭ではなく、長期にわたって耕作が行われていたという状況を示してはいない。

この調査区では、整地層と思われる６～８層で土師器や須恵器の微細片が４点出土したものの、古代寺院に関わる瓦などは認められなかった。

ｇ．４ｂ区（図18・23、図版19・20）

４ｂ区は４ａ区の北側に設定した長さ6.6ｍ×幅1.5ｍの南北に長い調査区である。塔との位置関係は、調査区東辺が復元塔基壇の南北中軸線から西に14.6m、同じく南辺が復元塔基壇東西中軸線から北に49.2m離れている。標高は南端で47.1m、北端で45.7ｍを測り、調査区全体が北に低くなる斜面地である。

この調査区では、地山面において南端近くで東西に延びる石列が検出された。石材は花崗岩・安山岩・砂岩などの角礫や亜角礫で、現状では２段程積まれている。この石列は、調査区西壁断面図で見ることができるように、地山の傾斜面と平坦面の変換点を僅かに掘り窪めて溝状に整形した箇所に並べられたものであり、石列と地山傾斜面との間には裏込め土のような様相を示す12層～14層が堆積していた。これらの土層からは、異なる時代の遺物が混在するものの、古代の軒平瓦片１点（図26－２、図版20－１）、平瓦小片13点、陶器小片２点などが出土した。この石列については、以上のような検出状況から石垣の基底部ではないかと思われる。おそらく調査対象地東半部で現在も見ることができる石垣に連なるものであろう。また、強く酸化鉄が沈着する砂質の７層が示しているように、この石垣の前面では狭い平坦地が造成されて田・畑の耕作が行われていたが、その後石垣は取り壊され、南側の高所から土砂を流して斜面地として整地され、果樹園（スモモ）もしくは竹林が営まれることになった。

なお、１層・３層・６層・９層・11層からも古代の丸・平瓦小片、現代の瓦小片、陶器小片などが僅かに出土している。

このように４ｂ区では古代寺院に関連する遺構、古代の瓦のみを純粋に含む遺物包含層などは検出されなかった。

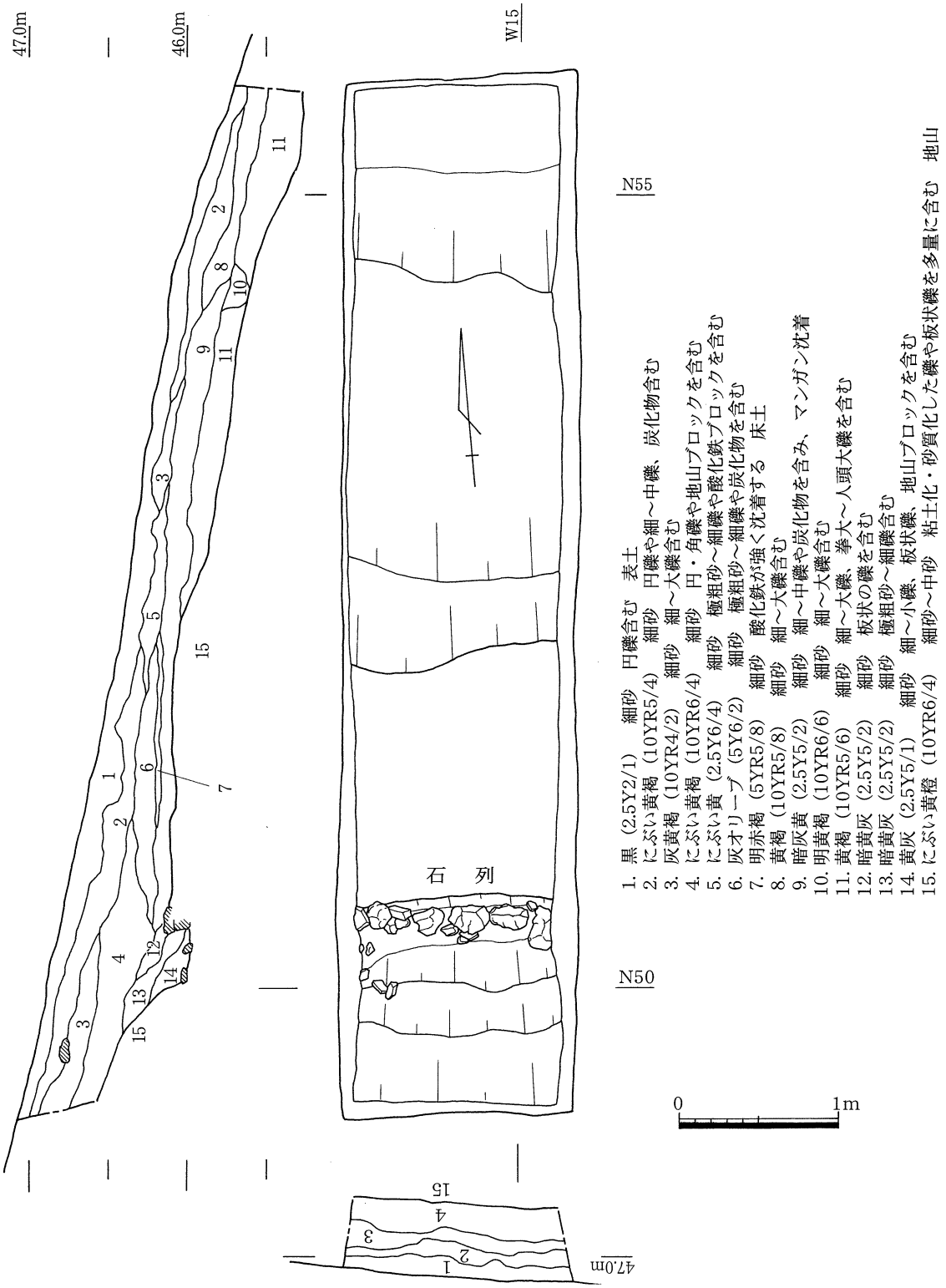


図23　4b区　平面図と土層断面図

h．４ｃ区（図18・24・25、図版21・22）

４ｃ区は長さ5.4m×幅1.4mの南北に長い調査区である。４区全体としては最も北に位置しており、塔との位置関係は、調査区東辺が復元塔基壇南北中軸線から西に14.7m、同じく南辺が復元塔基壇東西中軸線から北に58.2m離れている。標高は調査区南端で45.2m、調査区北端で44.5m

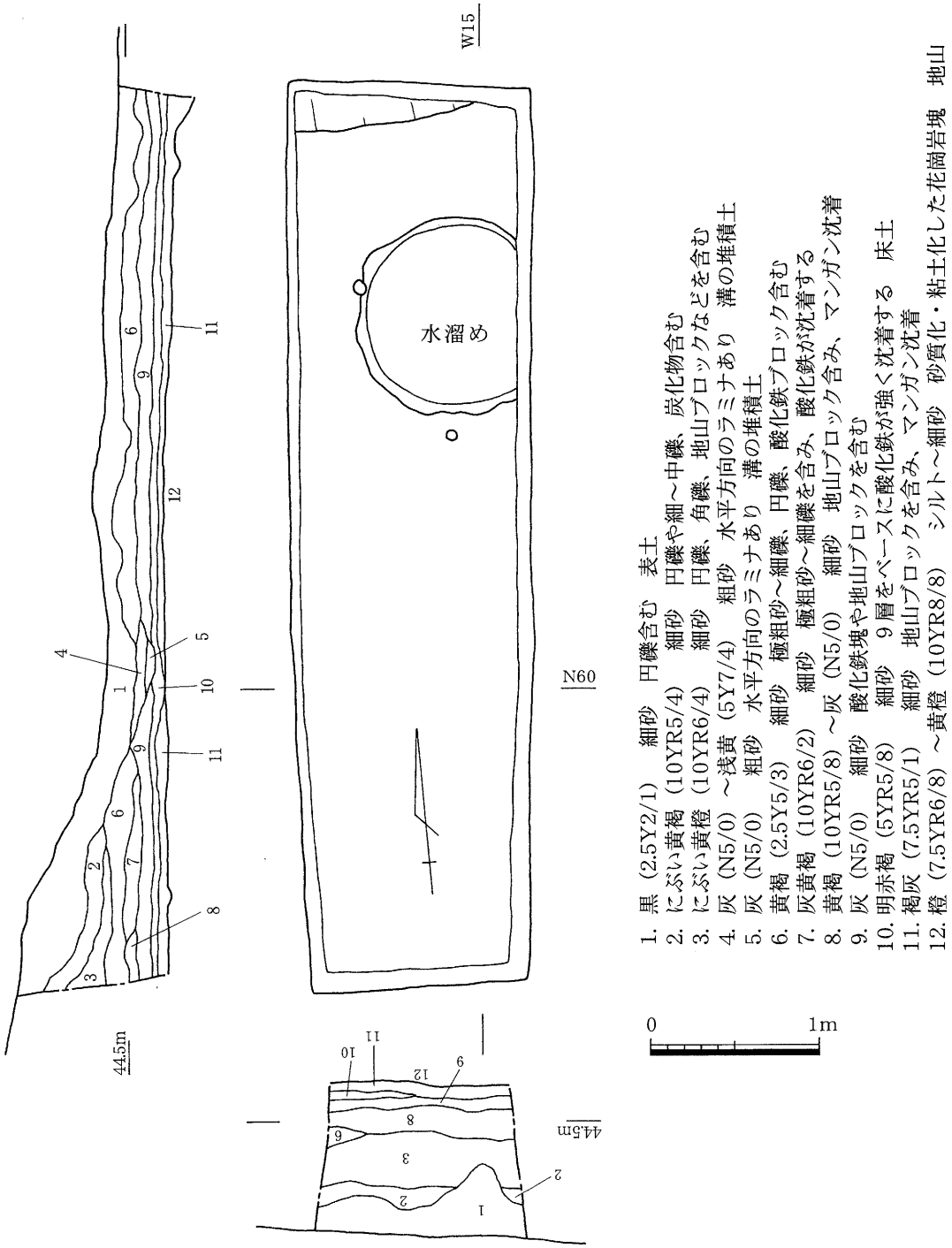


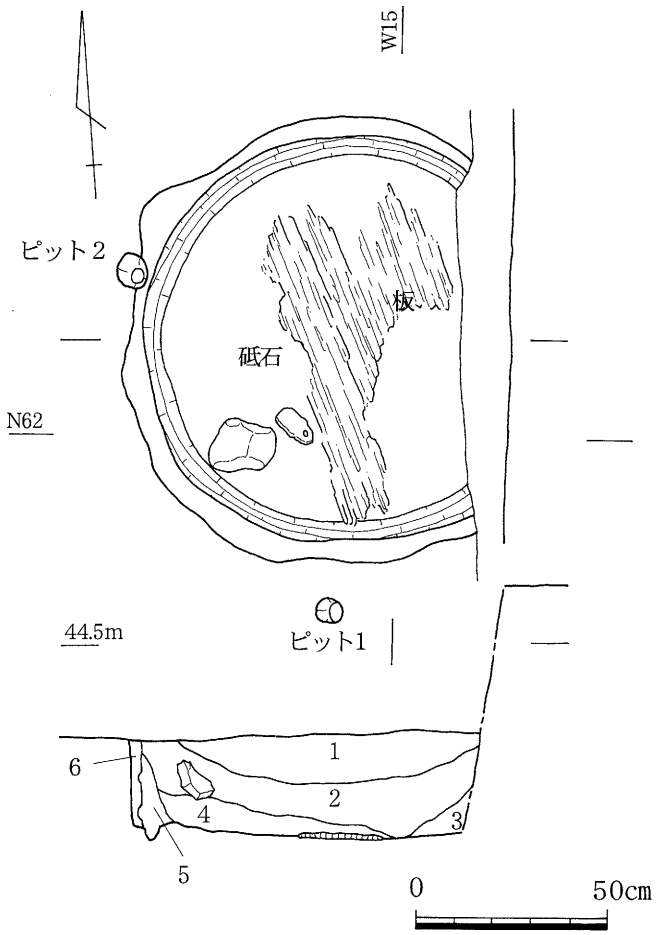
図24　4c区　平面図と土層断面図

を測り、調査区南端付近は急斜面、中央部から北側は平坦面である。

調査区壁面の断面図で見られるように、平坦部において地表から30cm程度の深さで検出される地山面は、調査区全体にわたって平坦な面を形成している。この平坦面を利用して、酸化鉄が沈着する細砂質層（11層）の広がりが示すように、広い範囲で田・畑の耕作が行われていた。その後、この耕作面を覆うように、おそらく４ｂ区斜面を形成する整地層に連なる土砂が堆積し、調査区南側で急斜面になる地形が形成された。急斜面と平坦面の変換点には４層・５層で示される浅い溝が掘り込まれていたが、これらの土層にはラミナが認められることから、溝は水路として機能していたものと思われる。そして、水路も含めて表土層に覆われることで現在の地形が見られるようになった。なお地山面は調査区北端部で急に傾斜している。

４ｃ区では北半部で円形の水溜めが検出された（図24・25）。この水溜めは、土坑底に遺された円形に廻る溝や板材、或は断面図に見られる箍の痕跡などから判断して、円形に掘り窪めた土坑に桶を埋め込んだものである。桶の側板は遺っていないが、直径はおよそ105cmで、側板と土坑の間に掘り返した地山土を充填して固定されていた。また水溜めの上部構造は全く分からないが、周囲には２つの小さなピットあることから、この小穴に細い支柱を差し込んだ簡便な覆いが存在したかもしれない。

水溜めの埋土からは鉄鎌（図版23－８）１点、寛永通宝（図版23－７）１点、砥石（図26－５）１点が出土している。砥石の一端には小孔が穿たれているので、寛永通宝を根付に利用した紐をこの小孔に通し、腰に吊るして持ち運んだものだろうか。さらに砥石の傍にあったチャート礫（図25）も、線条痕や敲打痕は明瞭でないものの砥石か台石の可能性がある。これらの遺物は故意に水溜めに投棄されたものなのか、或は偶然の落し物なのか不明であるが、



1. 明黄褐色（10YR6/8）　極細砂　マンガン沈着　地山起源
2. 灰（10Y5/1）　中砂　酸化鉄、マンガン沈着
3. 灰（10Y5/1）　粗砂　4. 灰（10Y5/1）中砂　5. 灰（10Y5/1）シルト
6. 灰黄（2.5Y7/2）　極細砂　マンガン沈着　地山起源
7. 橙（7.5YR6/8）～黄橙（10YR8/8）シルト～細砂　地山

図25　水溜め　平面図と土層断面図

それでも水溜めの周辺で行われていた農作業の情景を髣髴とさせるものがある。

この遺構については、年代としては近世・近代の時期が考えられるが、その機能については、ここまで記してきたような水溜め以外にも、その構造や周囲に耕作地が展開している状況からみて肥溜めの可能性もあろう。

以上のように４ｃ区では古代寺院に関連する遺物・遺構は検出されなかった。

ｉ.出土遺物、採集遺物（図26、図版23・24）

今回の発掘調査で出土した遺物は、ここまでに記したように何れも小片・微細片のため殆ど図化することはできなかった。ここでは唯一出土した奈良時代の軒平瓦（2）と近世以降の砥石（5）を掲載した。なお、古代の平瓦小片は一枚造りと判断されるものが殆どであり、１区・４ｂ区出土の平瓦の一部を図版23に掲載した。その一方、道を挟んで調査対象地の北東に位置する溜池（図18）では、掃除のために水を抜いた際に南側法面の下で奈良時代の軒平瓦（３・４）や平瓦を採集することができた。また、同じ場所で以前に採集された軒丸瓦（1）も存在する。ここでは、そうした溜池で採集された瓦も併せて紹介する。

２は４ｂ区で出土した軒平瓦である。瓦当の右半分のみが遺存する小片であり、全体に摩滅が著

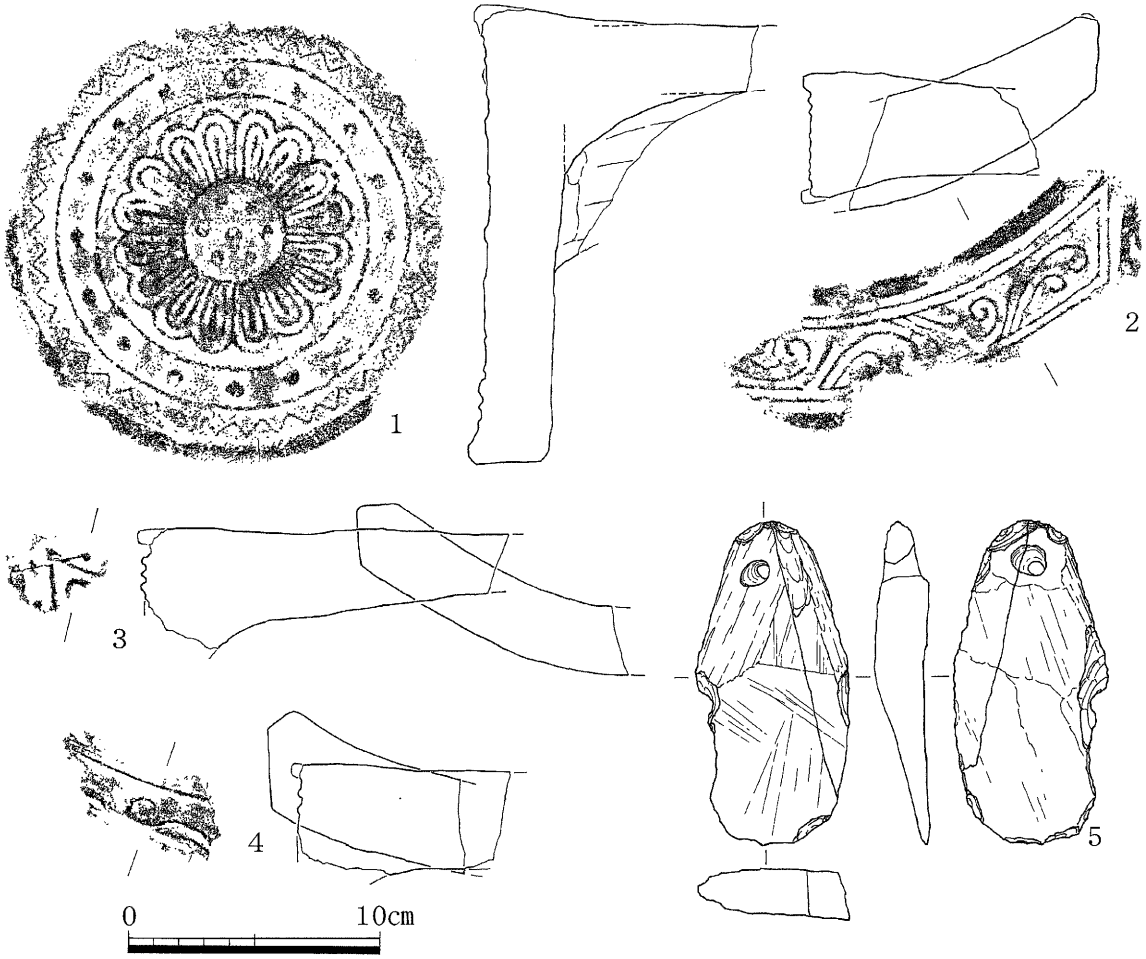


図26　出土遺物と採集遺物

しく、平瓦部凹・凸面の調整などは不明である。内区文様は均整唐草文で、界線から発する蕨手状の唐草文が中心飾りから外側に向けて反転しながら３単位見られる。外区文様は圏線である。瓦当の断面形は曲線顎で、厚さは5.5㎝を計測する。焼成はやや軟、色調は灰白色、胎土には長石・石英・くさり礫が多い。大阪府教育委員会調査の平瓦第１類(註1)に当たり、下外区の圏線は異なるものの内区文様は平城宮6663H型式(註2)に類似する。

３は調査期間中に溜池で採集した軒平瓦で、瓦当の左上隅のみが遺存する小片である。内区文様は中心飾りから外側に向けて５単位の唐草文が反転しながら伸びる均整唐草文と思われ、外区文様は珠文である。また、この隅部には明瞭な笵傷が認められる。顎は曲線顎で、縁の面取りは２面取りである。凹面の調整は瓦当部がヨコケズリ、平瓦部が布目＋ナデ。凸面の調整は顎部がタテケズリ＋ヨコケズリ、平瓦部がタテケズリ。焼成は堅緻、色調は赤褐色、胎土には石英・長石が多く含まれる。大阪府教育委員会調査の平瓦第２類(註1)に当たり、青谷式軒平瓦(註3)である。

４も調査期間中に溜池で採集した軒平瓦の小片で、瓦当の一部、しかも上半部が遺損するのみである。内区文様として横方向に伸びる唐草文の一部が見られ、外区文様は無さそうである。顎は曲線顎と思われ、縁の面取りは２面取りである。凹面の調整は瓦当部がヨコケズリ、平瓦部は布目。凸面（顎部のみ）の調整はナデ。焼成は堅緻、色調は黒色～オリーブ黒色、胎土には長石が含まれる。文様が僅かしか遺存していないのではっきりしないが大阪府教育委員会調査の軒平瓦第７類(註1)かと思われる。

１は今回の調査以前に溜池で採集された個人蔵の軒丸瓦である。瓦当面の内区中房には１＋６個の蓮子、弁区には複弁８葉蓮華文、外区内縁には16個の珠文、外縁には隆起線鋸歯文が見られる。瓦当面の直径18㎝、厚さ2.7㎝、中房直径４㎝、弁区直径11㎝を計測する。調整は、瓦当部内面はナデ、丸瓦部凹面は布目＋ナデ、凸面は縄目＋ナデである。焼成は堅緻、色調は黒褐色～黄褐色、胎土には石英・長石を多く含んでいる。大阪府教育委員会調査の軒丸瓦第３類(註1)に相当する。

５は４ｃ区の水溜めから出土した砥石。長さ12.9㎝、幅６㎝、厚さ2.2㎝、重さ180.7ｇ。全体的には長楕円形を呈し、やや細くなった一端に表裏両面から円孔が穿たれている。円孔の周辺に摂理面があり、その他の面は砥面になっている。石材は緑泥片岩。

５．まとめ

今回の調査は、河内国分寺塔跡の北側に広がる斜面地において、国分寺に関連する遺構・遺物の有無や遺存状況の確認を目的として行ったものである。その結果は以上に報告した通りであり、国分寺に付属する建物跡や関連する遺構は検出されなかった。

調査地については、塔跡の発掘調査報告書に掲載された「河内国分寺伽藍配置想定図」によれば、北に食堂、南に大炊屋を配した食堂院とされている（図27）。しかし、今回の発掘調査による限りこうした建物の存在を裏付ける資料を得ることはできなかった。調査地では、おそらく近世以降、斜面地に石垣を築いて耕作に適した平坦地を造成する、或は灌漑用水を確保するために溜池を穿つ、さらに土を盛って果樹園や竹林を営むなど、地形の改変が著しく進んでおり、これらの行為によっ

て本来存在したはずの遺構が消滅してしまったと考えられなくもないが、それにしては寺院に関連する遺物も極めて少なく、そうした可能性は低いように思われる。やはりこの場所に建物は存在しなかったと考えたほうが良いかもしれない。

この点については、例えば調査地の北東に位置する溜池で軒丸・軒平瓦を含む瓦類が多く採集されており、その溜池の北側、すなわち調査地の東方には緩やかな斜面地が広がっているという地形を考慮すると、従来から想定された河内国分寺の伽藍域をより東方に拡大して考える必要があるかもしれない。西方についても同様である。

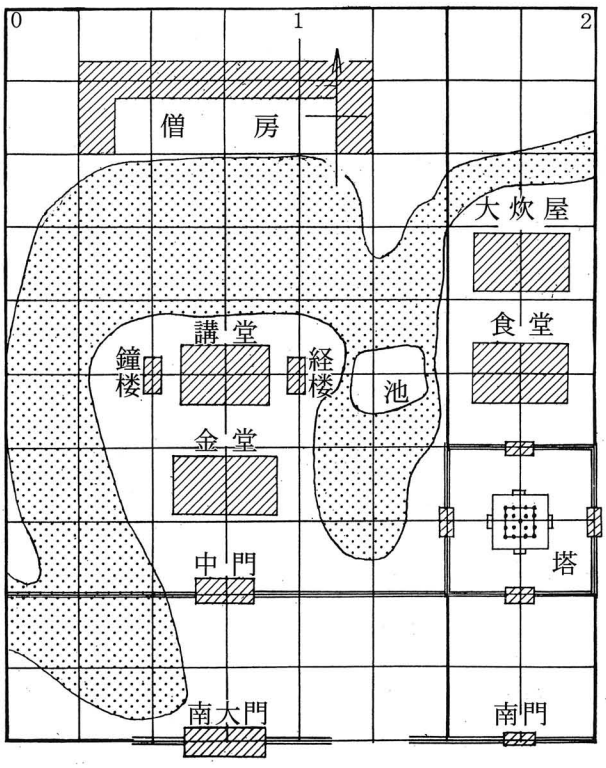


図27　水野正好氏の想定による伽藍配置（註1）

河内国分寺については塔のみが知られており、寺院の中心的な建物である金堂や講堂の位置すら定かではない。そうした困難な状況があるにもかかわらず、河内国分寺の伽藍配置として先の「想定図」が一人歩きしているきらいがある。今後は伽藍域が南北に長い「想定図」に囚われず、地形を踏まえた東西方向への広がりという視点を持ちながら、時機を得て、範囲確認・建物跡の確認に努めていかなければならない。

なお、平成17年３月20日に河内国分寺の地元である柏原市東条地区にお住まいの方々を対象に現地公開を実施し、平日にもかかわらず多くの方々にご参加いただいた。調査中のご助言・ご協力も含め、感謝申し上げます。

註

1　大阪府教育委員会『柏原市国分東条町河内国分寺跡発掘調査概要』　1970

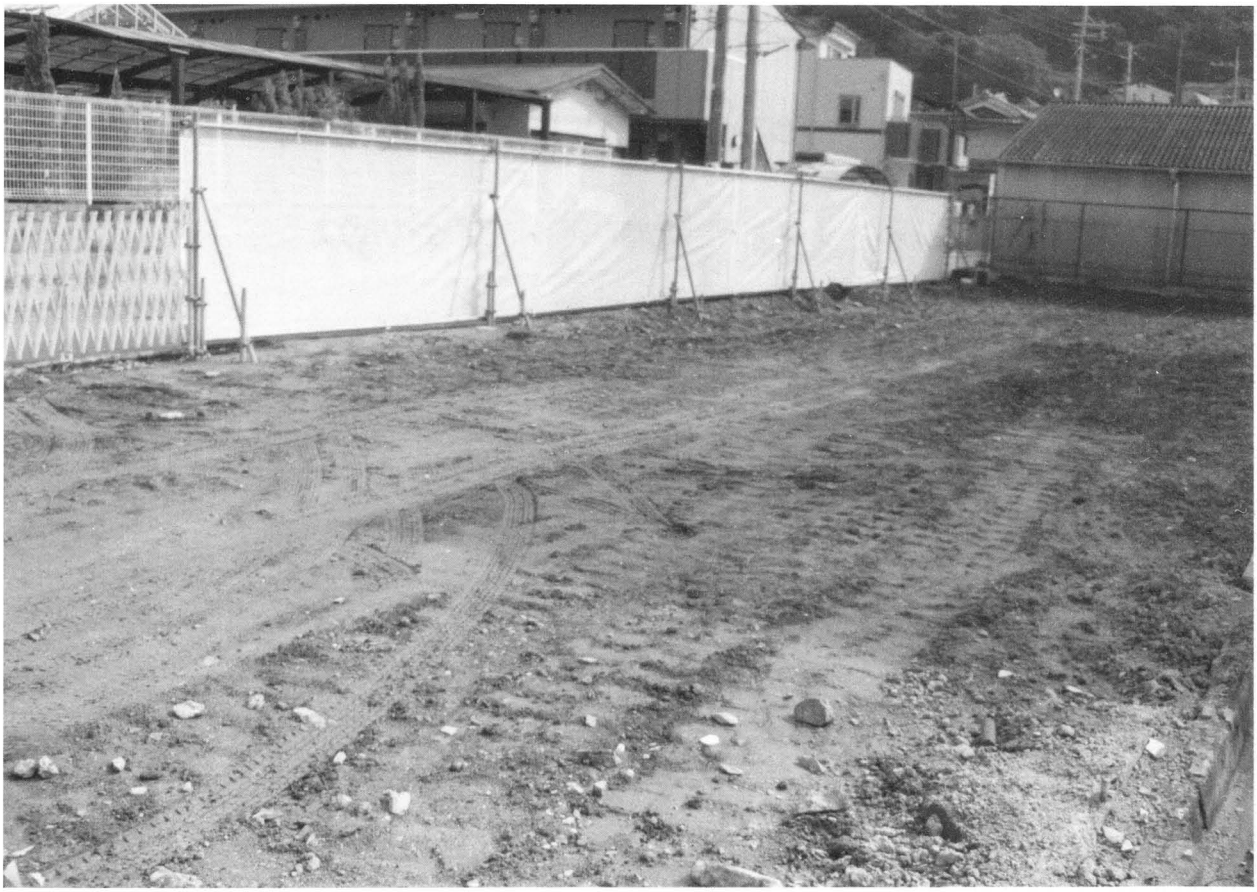
2　奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦型式一覧』　1978

3　古閑正浩「畿内における青谷式軒瓦の生産と流通」『考古学雑誌』89-4　2001

写　真　図　版

１　調査地全景（南から）

２　調査区土層断面



１　調査地全景（南西から）

２　調査区掘削状況

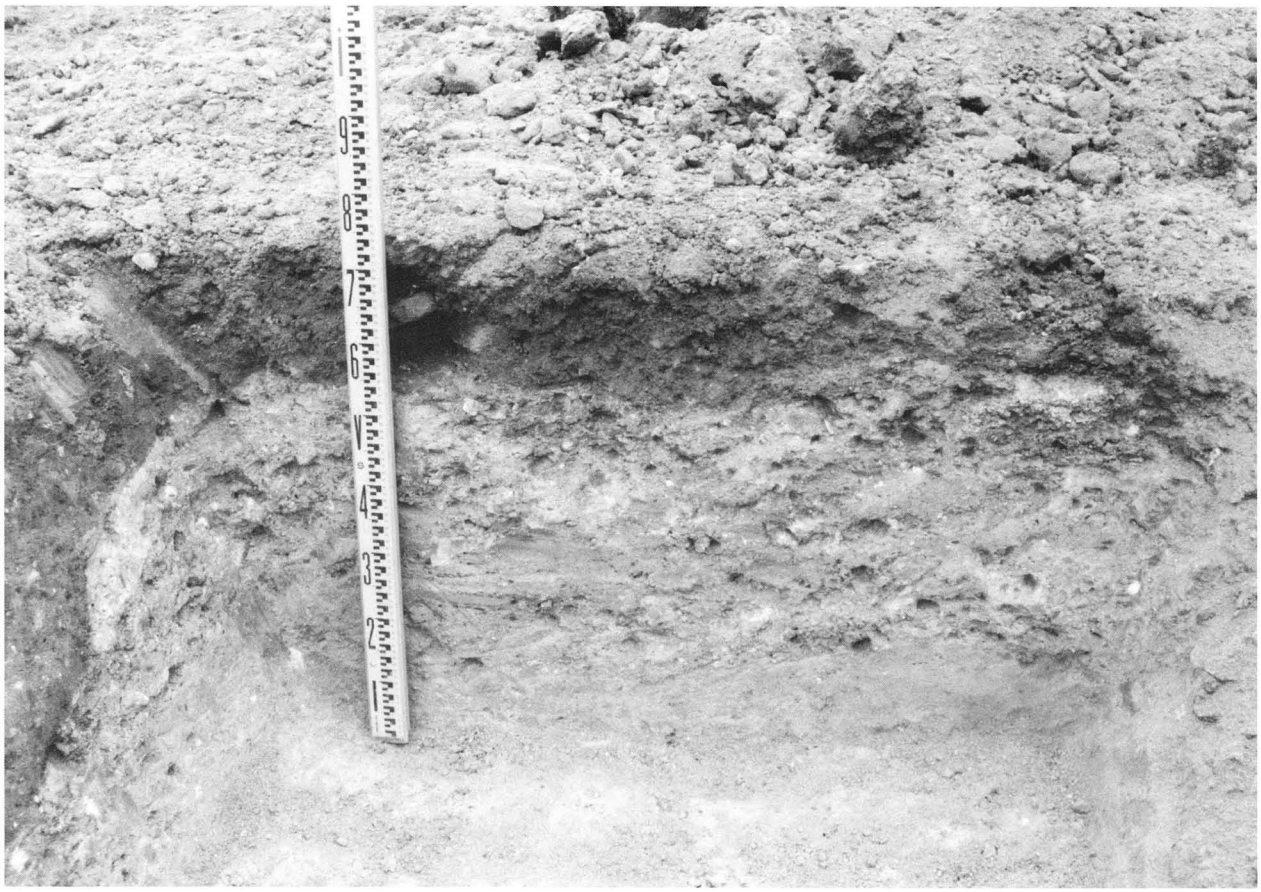
１　調査区掘削状況

２　調査区土層断面

１　調査地全景（東から）

２　調査区掘削状況

１　調査地全景（北西から）



２　調査区土層断面

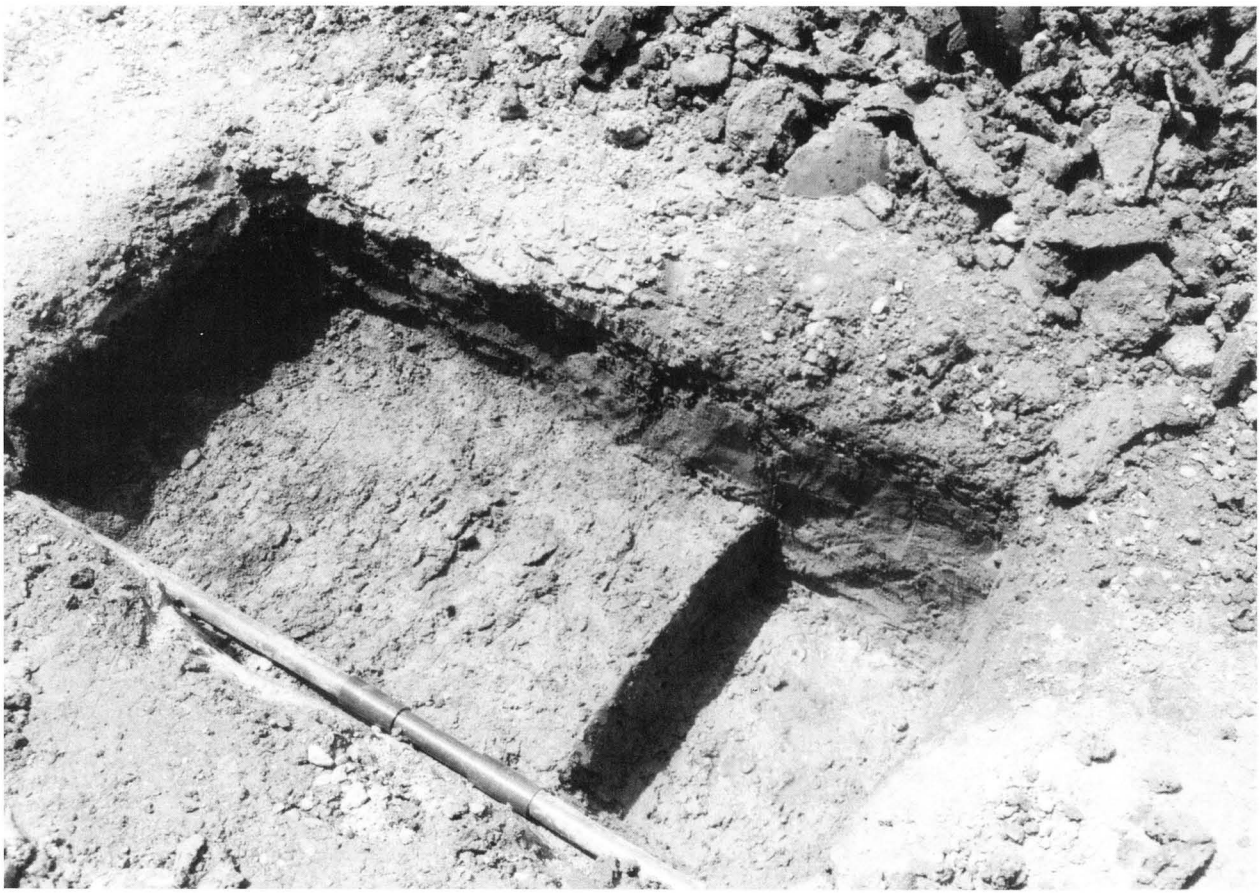
１　調査地全景（南西から）

２　調査区土層断面

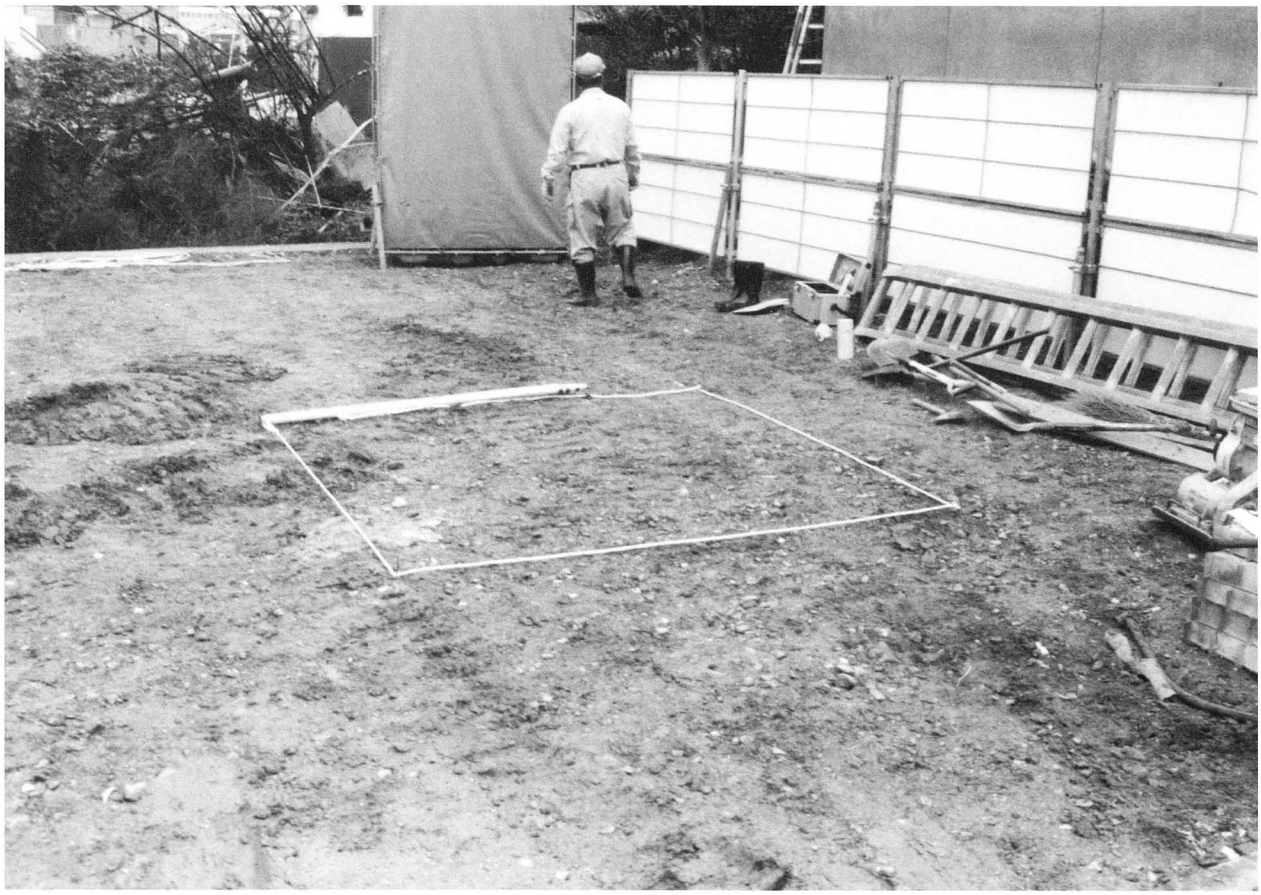
１　調査地全景（南東から）

２　調査区土層断面

１　調査地全景（南から）

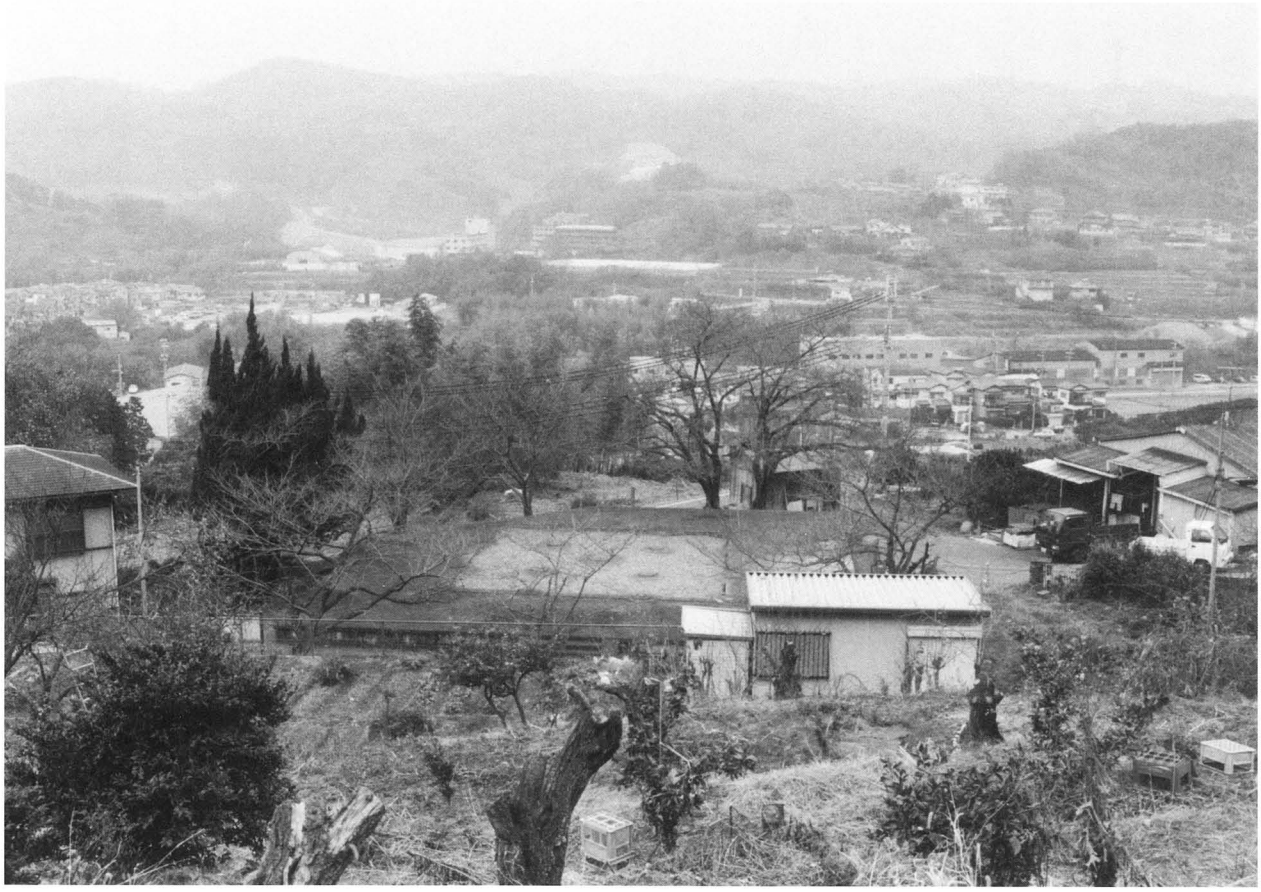


２　調査区掘削状況



１　調査地全景（南から）

２　調査区掘削状況



1　復元塔基壇を望む（南から）

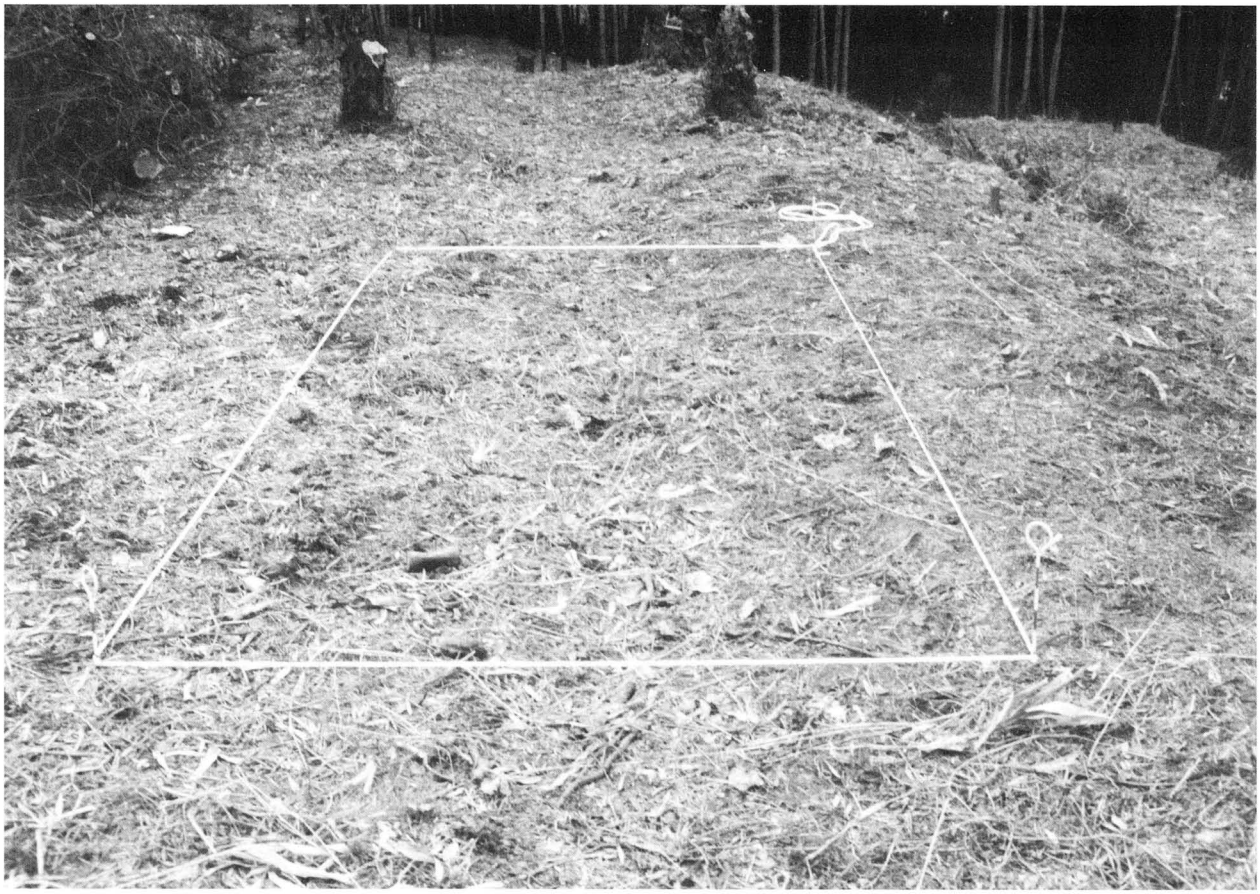
2　調査区全景（東から）

１　１区　調査前の状況（南から）

２　１区　掘削状況（北東から）

１　１区　土坑とその土層断面（北東から）

２　１区　溝とその土層断面（北西から）



１　２区　調査前の状況（東から）

２　２区　土坑壁面の精査（東から）

１　２区　土坑全景（西から）

２　２区　調査区南壁土層断面（北西から）

１　３区　調査前の状況（南から）

２　３区　地山面の状況（南東から）

１　落ち込み１（南西から）

２　落ち込み２（南から）

１　４区　調査前の状況（南から）

２　４区　調査状況（南から）

１　４a区　掘削状況（北から）

２　４a区　地山面と西壁土層断面（北東から）

１　４b区　調査状況（北東から）

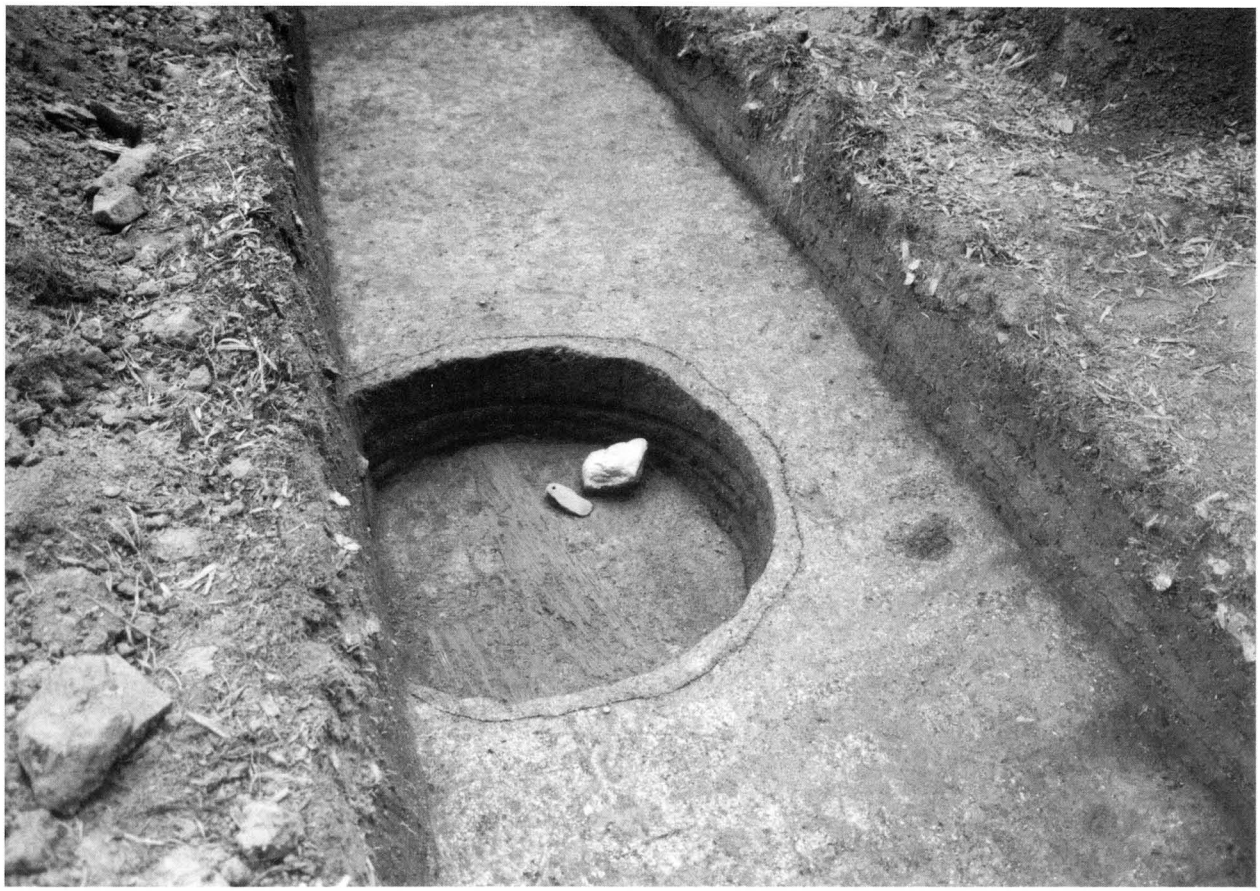
２　４b区　地山面と西壁土層断面（北東から）

１　４b区　軒平瓦出土状況（中央の小片、調査区南端部）

２　４b区　石列（上から）

１　４c区　調査状況（北西から）

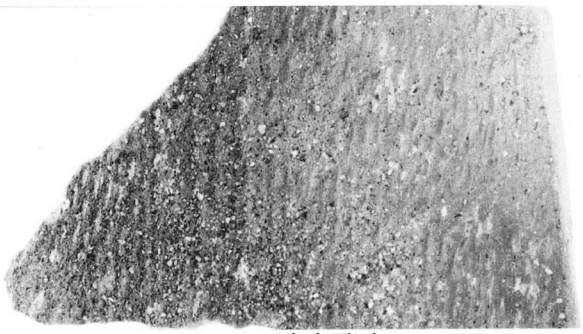
２　４c区　西壁土層断面（北東から）



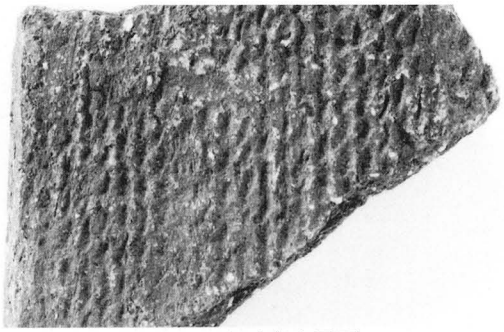
１　４c区　水溜め全景（北東から）

２　４c区　水溜め底面の桶底板・砥石・チャート礫

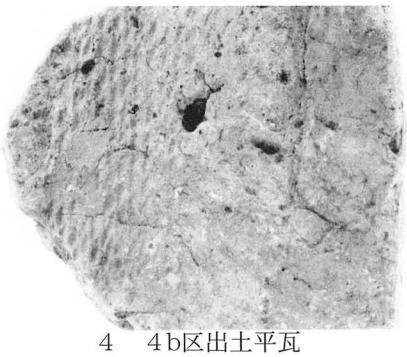
1　４b区出土軒平瓦（2）



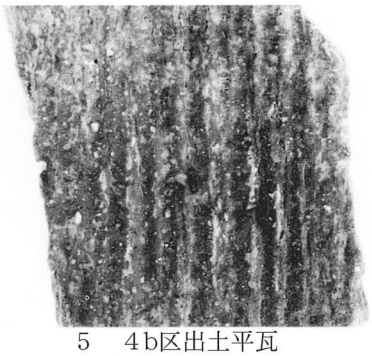
2　１区出土平瓦



3　４b区出土平瓦



4　４b区出土平瓦



5　４b区出土平瓦

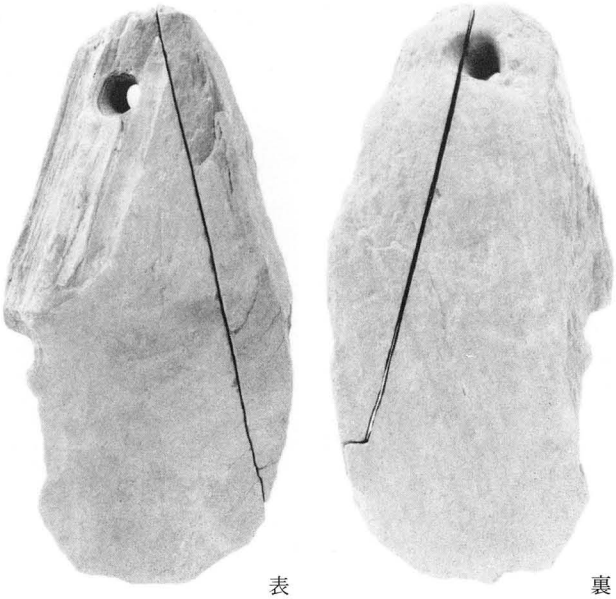
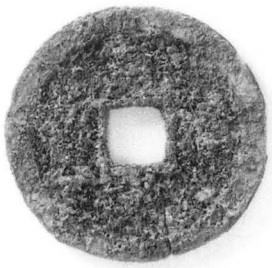


表　　裏

6　４c区　水溜め出土砥石（5）



7　同
寛永通宝

8　同　鉄鎌

1　溜池採集軒丸瓦（1）

2　溜池採集軒平瓦（3）

3　溜池採集軒平瓦（4）

報告書抄録

ふりがな	かしわらしないいせきぐんはっくつちょうさがいほう
書　　名	柏原市内遺跡群発掘調査概報　平成18(2006)年度
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	柏原市文化財概報
シリーズ番号	2007-Ⅰ
編著者名	桑野一幸
編集機関	柏原市教育委員会
所 在 地	〒582-8555　大阪府柏原市安堂町1-43　電話072-972-1501
発行年月日	平成20(2008)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度(北緯) 経度(東経)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
ひらの 平野	ひらの 平野2丁目	27221	HN 2006-1	34° 35′ 42″ 135° 37′ 53″	H19.1.31 H19.1.31	0.96	宅地造成
おおがたみなみ 大県南	おおがた 大県4丁目	27221	OGM 2006-1	34° 35′ 20″ 135° 37′ 53″	H18.10.3 H18.10.3	4.00	共同住宅
おおがたみなみはいじ 大県南廃寺	おおがた 大県4丁目	27221	OGMT 2006-1	34° 35′ 14″ 135° 38′ 04″	H18.10.4 H18.10.4	6.00	宅地造成
たまてやま 玉手山	たまて 玉手町	27221	TY 2006-1	34° 34′ 05″ 135° 37′ 50″	H19.3.7 H19.3.7	3.00	個人住宅
たなべ 田辺	こくぶほんまち 国分本町6丁目	27221	TB 2006-1	34° 31′ 01″ 135° 38′ 30″	H18.5.26 H18.5.26	4.00	寺院
	たなべ 田辺2丁目	27221	TB 2006-2	34° 33′ 33″ 135° 38′ 28″	H18.12.28 H18.12.28	3.00	宅地造成
	たなべ 田辺1丁目	27221	TB 2006-3	34° 33′ 38″ 135° 38′ 30″	H19.1.20 H19.1.20	1.50	個人住宅
かわちこくぶんにじあと 河内国分尼寺跡	こくぶひがんじょ 国分東条町	27221	KBNT 2006-1	34° 33′ 55″ 135° 38′ 54″	H18.8.7 H18.8.7	1.50	個人住宅
	こくぶひがんじょ 国分東条町	27221	KBNT 2006-2	34° 33′ 57″ 135° 38′ 53″	H18.10.12 H18.10.12	3.00	個人住宅
かわちこくぶんじあと 河内国分寺跡	こくぶひがんじょ 国分東条町	27221	KBT 2006-1	34° 34′ 03″ 135° 39′ 26″	H18.12.7 H19.4.10	57.15	範囲確認

所在遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平野	集落		なし	なし	
大県南	集落		なし	なし	
大県南廃寺	社寺		なし	なし	
玉手山	集落		なし	なし	
田辺	集落		なし	なし	
	集落		なし	なし	
	集落		なし	なし	
河内国分尼寺跡	社寺		なし	なし	
	社寺		なし	なし	
河内国分寺跡	社寺	近世、近代	水溜	軒平瓦、平瓦、砥石、鉄鎌	

柏原市内遺跡群発掘調査概報

平成18（2006）年度

発　行：柏原市教育委員会
　　大阪府柏原市安堂町１－43
発行日：平成20年（2008）３月31日
印　刷：斉　博　社